
とある科学の速度支配(スピードパラメータ)

マミツたあああ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の速度支配^{スピードパラメータ}

【Nコード】

N0284T

【作者名】

マミツたあああ

【あらすじ】

色々あって学園都市に転生した

御坂 美琴が好きな一般的な

少年が巻き起こすドタバタコメディー（多分）

プロローグ

拙い文章ですが、どうぞよろしくお願いします。

暴走するのは、仕様です

「あ、どうも俺転生しました。
転生先は、な、なな、なんと
とある魔術の禁書目録インデックスでございます。」

パンパカパン パンパンパンパンパカパン

「ふふ、流石神良い仕事するぜ」

美琴「俺だー結婚してくれー、とか言えるんだぜ

「カサッ」

さてどうするかな？なんて悠長なことを考えていると
何かがテーブルの上で揺れていた

「っん、なんだこれっ手紙？」
とりあえず見る

するとそこには、

「ハハハ、すまないと思っている
うん、すいません。」

とある科学の超電磁砲レールガン

の世界だが、大丈夫か？」

大問題だ（キリッ

落ち着け、COOLになれ、

よく考えろどちらにせよ御坂さんは、居るんだ。
だから、

（大丈夫だ問題ない）（キリッ

とりあえず、つづきを読むと

おれの名前は、黒井 茂
くろい しげる

能力名は速度支配
スピードパラメータ

LV・5並みのLV・4らしい

能力は、触れた物の速度をある程度操る

例外的に先に銃等に触れるとその弾の速度も操れるらしい

・・・これ強くな

とりあえずこれでプロローグ終了です

次から原作と絡め出します。

登場人物 (オリキャラ) (前書き)

今回は、主人公の紹介ですよ。

登場人物（オリキャラ）

名前 黒井 茂（くらい しげる）

168cm 55kg

女顔でスタイルは中の中くらい

ちょっとヘタレが入っている。

能力 速度支配（スピードパラメータ） Lv4

触れた物を加減速させる

銃などに触れると弾の速度も操れる（触れていた時の操作のみ）

1mまでなら、座標を計算すると速度を操れるが
あまり目的が早すぎると座標が絞れなくなる

主人公補正^{チート}

寮暮らし 奨学金で割とウハウハ

神の娘^{ロリ}のミスで神（娘大好き）に転生のチャンスをもたらすが
再び神の娘^{ロリ}のミスで超電磁砲^{レールガン}に転生。
まあ細かいことは気にしない。

レールガンの知識は、ほとんどなし
禁書目録の知識は、かなり自信あり

待望「笑」の第一話（前書き）

大変お待たせいたしました
第一話です

待望「笑」の第一話

とりあえずレールガンなら、御坂さんが主人公だし
うん。まず接触だ

迷った

やべえ、まじやべえ、確か銀行だったけど
どこらへんだよ《ドオン》

煙？あそこだっ

待ってるこんちくしょー

能力をつかって現場に駆け付けた時には、
すでに犯人は伸びていた

と、思われたが

ここでアニメとは、違う予想外の展開が起こった。

銀行のそとに居た犯人の協力者に
佐天さんが人質にとられた。

「動くんじゃないやねええええ
動けばこいつを殺すぜええ」
そう言つてナイフを佐天さんに突き付ける

なんて綺麗な死亡フラグ

「????ぐはあ」

加速して一気に近づき
後ろから念のために犯人に減速をかけて
ひきはがしてからぶん殴る。

フラグ消化完了

「大丈夫ですか？立てますか？」

「あ、ありがとうございます」
手を差し伸べると素直にとつてくれた

「顔色悪いけど大丈夫ですか」

《説明しよう》

主人公は、能力で加速して体を無理やり動かしたため
体がボロボロなのだ
それなのにかっこつけて手を伸ばした結果

「ぐはあ！」

コウナルノデス
そして、

「あなた私と戦いなさい！」

「なんで!?!」

なんで、訳がわからんですたい
「あなた、さっきの能力よね？」

だから、戦いなさい今すぐに！」
無茶苦茶やがな

《カチャリ》

「その前に、支部でお茶でもして行ってですの
まあ、ちよつとお説教させていただきますの
一般人が事件に横やありを入れた結果ですの」
「説教ならしょうがないわね、いつて^{カチャリ}r」
「お姉さまもですのこれでもう何回目ですの」
そして連れて行かれた

- 一時間後

「であるからして一般人が事件に介入した場合
人質の命まで危険に・・・」

一時間も説教されてまだゴールが見えない
だから俺は

- 1、仕方ないから我慢する
- 2、逃げる
- 3、御坂さんを助ける

「うおりゃー！」 《ダダダダ》

「つさせませんの」 《ヒュン》

「あれ、助かった。ラッキー」

助かったと思ひ、油断したのがいけなかった。

「御坂さん、これ反省文ね。」

「うわあああん」

「ここまで逃げればいいだろう？」

《ヒュン》 「逃がしませんの、と言いたいところですけど

お姉さまを助けようとした心意気を評価して逃がしてあげますの
「なぜばれたし

「ありがとうございます！
たすかったああ

「これだけ書いてくださいの
《ドサツ》

「は、はは、嘘ですよね」
100枚はあるぞ

「出来たら連絡くださいの
「うわあああん」

二人とも場所は違えどシンクロしてましてたとき
めでたしめでたし

待望「笑」の第一話（後書き）

次からは、三日置きくらいに投稿できたらいいなあ
感想書いてくれてもいいんだからね！

連投（疲）の第二話（前書き）

本日二本目

ゆっくりしてってね

連投（疲）の第二話

よし、冷静になれ

まずは状況確認だ。

俺は、頼み込んでなんとか反省文を50枚にしてもらって翌日に出来たので連絡すると直接来いとの話だったので177支部に来たのだ

しかしそこには、黒こげになった黒子がいた《ギャグではない》

抱き起そうとすると、我らの憧れの御坂 美琴さんいたのだ。

そしてなぜかいきなり勝負を挑まれたのだ。

そうして、おれは今に至る

「こないなら、こっちから行くわよっ！」

「っ！！」

飛んできた電撃を必死によける

「あっ！」

そして気付く自分の能力に

「加速！」

2倍速位で動くと言撃を余裕を持って避けることが出来る様になる

「あの〜ちよっといいですか？」

「なによ！？」

「勝った方の言うことを負けたほうが聞くことにしませんか？」

《ピキッ》

「ずいぶんと余裕じゃない！」

そう言うと砂鉄の剣を作りだした

「これでも食らいなさい！」

「うわっ危ない」

くそっ、一気に決めてやる

「加速！」

「えっ、ちょっ、まっ」

《ピタッ》

「おれの勝ちですね」

「うっ、しょうがない私の負けよ」

「じゃあ連絡先を教えてくださいよ」

「へっ、それくらいなら別にいいのに」

「あっ、なら服買ってくださいよ。ボロボロなんですよ。」

さっきのときにかすった電撃とかで服が破れているんだ。

「じゃ、セブンスミストでいいわよね」

「お願いします」

セブンスミストにて

「あれ？御坂さ〜ん」

「あ、佐天さんじゃない」

「あれ、もしかしてあの時の人ですか？」

「あ、うん」

「やっぱり！ありがとうございます。すごくかっこよかったです
！！」

お名前なんて言うんですか？なんて能力なんですか？……」

一気に喋られてよくわからない

「えっとあの佐天さんって呼んでいいかな？」

「はいっ！」

「とりあえずおれの名前は黒井 茂

あれは、俺の能力で速度支配^{スピードパラメータ}レベルは4

触れたものの速度をある程度操れるっていう能力だ」

「暗そうな名前ね」
「ところで、何してるんですか？」
「見ての通り服がボロボロにされたから買ってもらいに来たんだ」
「じゃあ、私も一緒にいいですか？」
「いいよ」

どうしてこうなった

「あのなんで」つぎは、これ着てください」「…はい」
どうして女装させられるんだ

「…着てきました」

「「おお」」

「もうそろそろ自分の服を買ってくれませんか？」

「へっ、もう選んでるじゃない」

「嘘ですよね、嘘ですよねえ、目をそらさないてくださいよ…」

「ジョークよ、ジョーク」

「もちろん冗談ですよ」

「あのこつちを見て言ってくださいよ」

目がバタフライしてやがる

「えっとこれで良いんじゃない」

「ずいぶんとテキストですね！まあいいですけど」

とりあえず買ってもらえた服に着替える

「「はあ」」

「露骨にいやな顔しないでください…」

「ていうか肌きれいよ、何かしてんの？」

「いや、とくになにも」

「「嘘だ…」」

「じゃ〜、そういうことで、さよなら。加速！」

「まちなさいよ〜…」

後日 筋肉痛で丸一日動けなかつたとさ
めでたしめでたし

連投(疲)の第二話(後書き)

遂に、主人公の女装シーン

恒例にしてやろうか

今回の女装は、白のワンピースに青のカーディガン

虚空爆破へグラビトン〈事件 上 (前書き)

すみません!!

データが消えました。

こまめに保存しなきゃなと思いました。

誠に申し訳ありません

虚空爆破へケラビトン《事件 上

「暑い」

夏休み一歩手前のある日、1人の少年が呟いた。

「暑い暑い暑い!!」

その部屋には、クーラーが無かった

「こんなところにいられるか

私は、ファミレスに行くぞおお!!」

《シユタタタタ》

とあるコンビニの前

「不幸だあああ!!」

回りまわって5軒目でもやはり満員だった

5軒目にでもなれば人の口癖だろうがぱくりたくなる

なぜコンビニかって?それは

「よろしい、ならばコンビニだ」

と言ってコンビニを目指したのであった

そして6軒目のコンビニ(ファミレスを入れて8軒目)にて

「キタ (???)」

思わず叫んでしまった

しかし、遂に楽園を見つけたのだ

「うへひゃきゃきゃきゃ」

しかしこの男ノリノリである

その時

《ぷるるるるるる》

電話が鳴った

「ん、誰だ」

と言って携帯をとると、なんと我らが御坂さんではないか
「何の用だろう」

「ちょっとあんたこれからセブンスミスト来れる？
っていうか来なさい今すぐに！」

「おおう、強引ですねぇ」

「どうせ暇でしょう？」

「いや、そうですけどぉ」

「じゃあ、すぐに来なさいよ」

「ちょっと待ってk「ピッ」切られた・・・」
「まったくご、う、い、ん？」

「まあ行きますけどね
そして樂園を後にした

とある路地裏にて

「ふふふ、くすくす、はっはっは
最高っだ！この力があればあいつらに復讐できる！
僕は、自分で自分を守る！

僕を守らなかつた風紀委員は、イラナイ」

「ちょっと、あの人もしかして変態？」

「見ちゃ駄目だよ、絶対めんどくさいよ」

「そうだね。あ、早く行かないと売り切れちゃうよ」

「よし早く行こう」

「む、あれは、風紀委員だな

見回りもしないでショッピングとは、良い身分だな

ちよどいい、僕の能力の実験台にしてやる

フハハハハハ！」

虚空爆破へグラビトン〈事件 上 (後書き)

後書き シリアスブレイカ 発動!

この小説にシリアスなんて、ほとんど入れさせない

あと、登場人物「オリキャラ」紹介少し変更いたしました

虚空爆破へグレイトン<>事件 中(前書き)

日曜なので、連日更新

初春さん登場

ゆっくり楽しんでいってね

原作に、とある魔術の禁書目録を
追加しました

虚空爆破へグラビトン〈事件 中

「お、早かったじゃない」

呼び出しをくらった後、場所が近かったのと能力を使ったのでかなり早く来れた。すると御坂さんと

「お久しぶりです、黒井さん」

佐天さんに隠れてよく見えないけど花瓶が立っていたって

「花瓶が立ってるうう！」

「花瓶じゃないですよ！」

「そして喋ったあああー！」

花瓶がしゃべりだした、これが学園都市の本気なのか！

「そんな所に居るからじゃない」

「うわああ、ちょっといきなり何するんですか、佐天さん！」

2人の後ろからでっかい花飾りをつけた女の子が出てきた

あの花飾りは確か初春さんだったっけ

「申し遅れました、私初春ついはる飾利かざりと申します」

「あ、俺は、「ストップです、知ってますよ、確か黒井 茂さんですよね」

「あれ、なんで知ってるんですか？」

「え、いきなり事件に首突っ込んで知らないんですか？」

ああ、銀行強盗のあれですね、分かりました。と思っていると
「もしかして、天然さんなのかな？」

「そう言えばさっき私を花瓶って言っていましたしね」

「いや、初春は、遠くから見たら完全に花瓶を頭にのせてるようにしか見えないよ」

「つづ、くす、そんなことないわよ？」

「いや、最初見たときからずっと花瓶にしか・・・」
「ガールズトークに花を咲かせていた」

「あの暑いんで中入りしましょうよ」

「とりあえず…暑い」

「あ、それもそうね、早く入りましょう」

どうしてこうなった

今あったことをありのまま話すぜ

前に買い物に行った時のように気が付いたら

試着室に女ものの服と一緒に入れられてたんだ

すまない、意味がわからないと思うが

俺にもわからないんだ

そして今ほかのみんなが

俺に何を着せるかを議論してるんだ

もちろん逃げようと思ったがテレポーター並みに早かった

そして今に至る

「次は、こっちのナース服を！」

「いや、このレースクイーン風のを着せた方が良かったですっ！」

「いやいや、あえてチャイナ服を着せようよ！」

どうしてこうなった

あ！あのウニみたいな頭は上条さん！こうなったら

「あ、あれはなんだ！」

「「「ふえ」「」」

いまだ！

「たすけてー！」

そして上条さんにつっこむ

「どうか、どうか助けてください！」

女装させられるー！」

「えっ、一体どうゆうことなんですか？

女装ってあなた女の人じゃないですか？」

「え、一体俺のどこが女だって言うんですか？」

今の装備　メイド服

そんな装備で大丈夫か？

大問題だ（キリッ

「これは、あの人たちが「黒井さくん、まだ終わってないですよ」

ヒッ！とにかく足止めお願いします」

「は、はあ」

「お客様！代金をお願いします！」

「あの女の子たちが払います！」

止まったらやられる逃げろおおお

「「「そこをどいて／＼ください！」」」

「不幸だああああ！」

虚空爆破へケラビトン事件 中（後書き）

どうしてこうなった

（＾０＾）ノ

やはり、恒例化するのか主人公の女装
そして女の子空気

虚空爆破へダレビトン事件 下(前書き)

今回、長めです

ゆっくりしていらしてねー！

虚空爆破へグラビトン〈事件 下

「はあはあ、これだけ逃げればもう大丈夫だろう」

今俺は、メンズ用品売り場に身を潜めている

元の場所とは、かなり離れているから大丈夫のはずだ

大丈夫だよな、な

後は、ここで息をひそめていれば「ねえねえ、お姉ちゃん？」

《びくう》

「あの、さっきのジャツジメントのお姉ちゃん知らない？」

なんだ、さっきの上条さんの隣にいた女の子か

ちなみにお姉ちゃんと呼ばれているのは

俺の服がメイド服だからだ

「ああ、知ってるよ

あっちの方だけどわかるかな？」

「んー、ちよつとわかんないかも」

「じゃあ、一緒に行こうか？」

「うん！」

「よし！行こうか

後、今は、こんな服だけど俺は男だからな」

「うん！お姉ちゃん！」

だめだ、こりゃ

御坂 s side

「くそ！あんたが邪魔するから見失ったじゃない！」

「そうですよ！どうするんですか！？」

「いや、上条さん的には、自分も女の子とはぐれて悲しいんですよ

「うっさい！」

ああ、もうせつかくの楽しいおもてy

もとい黒井を見失ったじゃない

《prrrrr》

「あ、ちよつと失礼します」

そう言つと初春さんが携帯を取り出した

「白井さん、どうしたんですか？」

『初春！今急激な重力の加速を感知しましたの！

場所は第7学区の洋服店セブンスミストですの！』

「ちようどいい、今ちようどそこにいます！」

『初春！犯人の狙いは《ブツツ》初春！初春！』

「落ち着いて聞いてください2人とも！

今ここで急激な重力の加速を確認しました

御坂さんは、避難誘導の協力をお願いします！

佐天さんは、急いで避難してください！」

「わかつたわ！」

「え、う、うん

初春も気をつけて」

主人公 s i d e

ん、なんだ閉店だった？

そんなことになったらこの服で帰らないといけないじゃないか

「急ぐから、背中に乗ってくれない？」

「うん！」《ぽふっ》

女の子が乗ったのを確認してから能力を使用する

「加速！」

「速い！速い！」

女の子大はしゃぎ！

「あんまりはしゃぐとしたかむよ？」

「はっい！」

御坂 s i d e

セブンスミスト外にて

初春さん大丈夫かな？

「おい、ビリビリあの女の子知らないか？」

「ビリビリいうな！って一緒じゃないの？」

「もしかして中に…」「何やってんのよ！《ダッ》」「おい…！ビリビリ
！《ダッ》」

初春 s i d e

「よし！もう大丈夫ですね！」
そう言つて携帯を取り出し、白井の番号にかける

《 p r r r r ピツ 》

「もしもし、白井さんですか？
現場の避難終わりました！」

『今すぐそこを離れなさい初春！』

「えっ？」

『今までの人的被害はすべて風紀委員ですの！
犯人の狙いは、現場付近の風紀委員ですの！

つまり、今回のターゲットは、初春！貴女ですの！』

「え！」

主人公 s i d e

おっ！あれは初春さん

「よし、お姉ちゃんあそこにいたぞ！」

「あ、ほんとだ！いつてきまゝすお姉ちゃん！」

「はい、いつてらっしやい！」

そういつて手をひらひらふると

元気に駆けていった

初春さんに何やら人形を渡していた

と、思うといきなり初春さんが人形を投げ捨て叫んだ

「あれが爆弾です！逃げてください！」

その瞬間に能力を使って加速していた
くそっ間に合わない

あの爆弾の重力加速が遅くなればいいのに
遅く！遅く！遅く！

その瞬間重力の加速が少し遅くなった！

っ！そのおかげかなんとか間に会いギリギリで
爆弾を蹴り飛ばすと窓を突き破り空中で爆発した

爆風で窓のガラス破片が初春さんに刺さる前に抱き庇う
ガラスがかすり、メイド服が破れる
そして爆風が収まると
立ち上がる

「初春さん、大丈夫？」

と、いつて手を差し伸べる

「あ、ありがとうございます」《ずるっ》

ずるっ？

目の前で初春さんがボンッと音を立てて爆発したので
自分の服をみるとシャツとパンツだけになっていた

え？

なんか御坂さんが電流だしてる

「いや、これは違くて、事故ですから
その電流を収めてください御坂さん！」

「うっさい！なんてもん見せてんのよおおおお！」

「いや！ちよつと今さっきの能力の行使で体がボロボロでって
うわああああ！」《ビリビリビリビリ！》

《ボオン》

ああ、携帯も壊れたよ

そこで、意識が途切れた

とある路地裏で眼鏡の青年が不気味に笑う

「ふふふ、いいぞ、想像以上だ

もっと数をこなせばレベル5にだって

「レベル5にだって、なんだ？」

少年の後ろにツンツン頭の青年がたっていた

なんだこいついつの間になっていたんだ？

まあいい、聞かれたなら殺すまでだ

「いや、レベル5にだってこれならきくって言ってたんだっよ！」

《ブン》

眼鏡は、そう言いながらアルミ製のスプーンを投げて爆発させる
これで、殺せる

はずだった

「てめえ、あぶねえじゃねえか」

その青年は、アルミの爆弾を右手で握りつぶした

「あとの爆弾な、けが人はかすり傷を負ったのが1人だけだったぞ」

「そんな、なんで？」

そうか、また僕は、邪魔されるのか

いつもいつも、圧倒的な力で邪魔されるんだ

くそっ僕のと看とは違つて風紀委員がよく働いたな！

畜生！理不尽だ！くそっ！」

《ガン》と音をたててメガネの少年が少し飛ぶ

「たとえお前が、どんなに理不尽な目にあつていようと

他の奴にその理不尽を押しつけていいわけには、

ならねえだろうが！」

ツンツン頭の青年が一步近づくと

「ヒッ」と少しメガネがおびえる

「もしおまえがその理不尽を人に押し付けるつて言つなら

そんな幻想は、俺がぶち殺す！」

と、青年は、叫んだ！

虚空爆破へゲラビトン事件 下(後書き)

風紀委員か

ジャッジメントが統一しろ俺！

常盤台 眉毛事件 上（前書き）

前回、グラビトン事件は
もう一回あると言ったな

・・・あれは、嘘だ

・・・でも書きたかったんだ！
佐天さんの眉毛が！
だから、気にしないでね

常盤台 眉毛事件 上

後日談っていうか前回のオチ

いつものように、筋肉痛を我慢して

一学期最後の学校に行つて能力検査を受けると
能力が少し強くなっていた

やったねたえちゃん

能力効果範囲が増えるよ！

詳しくは、設定を変更したのでそちらをどうぞ

閑話休題

犯人は、捕まったらしい

捕まった時の犯人の顔は、妙に晴れ晴れしていたらしい

ちなみに、「らしい」と、いちいちつけているのは気絶させられて
いたからだ

しかし、そのあと携帯を買ってもらつ約束したのは、別の話

御坂side

「分かりませんわ、どうなってますの？」

一緒に歩いている黒子が、不意に呟いた

「は？いきなりどうしたのよ？」

「今までの事件でどうも犯人のレベルと

事件の被害が一致しない事が多いんですの」

「はあ、そうなの」

「たとえば虚空爆破事件では、

眼鏡は、レベル2でしたの」

「嘘！？あの爆発は確実にレベル4クラスだったわよ！」

黒井が蹴り飛ばしたとはいえ、外からでもすごい爆発だった

「後は、連続通り魔事件もですね」

「ああ、あれは気の毒だったけど、おもしろかったわね」

そう、あれは虚空爆破事件の少し前

グラビトン

《prrrrr》

「うん、なんだ？」

せつかくの休日なので爆睡していたところ

電話がかかってきた

「うん、なんだってんだよ？」

まだ十時なのに」

愚痴をもらしつつ携帯の着信主の名前を見る

【着信 御坂 美琴】

すぐに取り込まなければ命を取られる気がした

「はい、なんでございましょう?」

『あのさ、ちよつと頼みがあるんだけど』

弱弱しい声でそんなことを言ってきた

そんな声で言われたら断れるわけないじゃないか!なあ、そうだから!

「自分に来ることならなんでもどうぞ!」

そう答えると御坂さんの声色がいきなり変わった

『じゃちよつと、女装してよ!』

「あ、電波がちよつと悪いみたいです

あゝ、ああゝ」《ぶつっ》

なんで女装させたがるんだ皆!

絶対女装してたまるか!絶対にだ!

《ピンポーン》

おっと、こんな時間に誰か来たようだ

《がちゃ》

「「「おじやましますす／＼ですの／＼するわよ／＼」「「「

全員、はもつただと!

「それで、なんで着替えてもらったかと言つと・・・」
「女装させてから言わないでくださいよ」
「今なぜか常盤台の制服を着せられた
女子4人がかりで」

「さっき言ったじゃない」自分に出来ることならなんでもどうぞ！
つて」

「うぐ、そこをつくとは、汚い流石御坂さん汚い」

「で、さっきの続きなんだけど・・・」

「あぁん、ひどぁい」

で、その話を要約すると

常盤台の生徒が襲われている

ジャツジメントが何とかしないと！

でも襲われるのやだなぁ

よろしい！ならばみがわりだ！っていう感じだ

「さて、と」

《ガシッ》

「何逃げようとしてるの？」
手を掴まれた

バツ（てを振り払おうとする音）

ガシツ（全員につかまれる音）

ズザア（スライディング土下座の音）

「勘弁してください！」

「無理です！」

「あきらめなさいな」

「あきらめてください！」

「しょうがないじゃない！」

次々と拒否される

俺の意見

「いやだー！」

「さあ行きましょう平和の為に！」

落ち着け！考える考えるんだ！

《ピーン》

そこで思いつく悪魔的アイデア

いや、そこまですでもないけど

「あ、そうだ！俺男だから学舎の園には、入れないですよ！
完璧だ！これで勝つると思っっていたら
ため息を吐かれた

「あのねえ何で女装させたたと思ってるの？」

「趣味？」

「否定はしない！」

「否定してよ！っていつかそんな簡単にごまかせるわけが

「なんでだー！！！」

おかしいな学舎の園簡単に入れるじゃないか
って簡単には入れちゃダメだろ！
何やってんだ！学舎の園！

「とりあえず、裏路地を歩きまわってよ」

「えっと、その間見張っててくれるんですよね？」

「いや、喫茶店で待ってるわ」

「ひどっ！！！」

そんな俺が命を賭けてるのに
まったくガールズトークするだと

「それは、あんまりですよ御坂さん私付いていきますよ！」

「佐天さん、あなたってホントは女神なんじゃないんですか？」

ああ、こうごうしい！

「嫌だなあ、さあ、行きましよう！」

「そんな危ないわよ佐天さん！」

御坂さんエ

《プップー》

「危ない、佐天さん！」

「へっ」《ドン》

常盤台 眉毛事件 上（後書き）

むふふイベントキタ

（？？）

！！

まえがきでも言った通り書きたかっただけです
サーセンWWW

常盤台 眉毛事件 中（前書き）

やはり、3個に分けました

まあ、ゆっくりしていけよ

あ、ちょ、石なげないで

すいません調子に乗ってました
では、いつものように

ゆっくりされよ！

あっすいません岩はやめてください

（以下略）

常盤台 眉毛事件 中

「はあ、不幸だ」

何を隠そうこの俺は今、人目につかないような所を散策しているのだ
・・・1人で

いやあ、事故だったとはいえやつちまったなあ

それにしても柔らかかか「いかんいかん何思いだそうとしているんだ」

そう言っつて思考を切り替える

「とりあえずあとで、何かおごつて機嫌を直してもらおう」
なんて考えていて、ふと時計を見ると10時になっていた
散策開始から2時間も立っている

しょうが無いので御坂さんに連絡を入れる

《prrrrrrr》

『あ、何かあつた?』

「いいえ、なにもないんですよ

ところで佐天さんまだ怒ってます?」

『あゝ、いまの所は、そんなに怒ってないわよ』

「よかつたゝ、じゃあちよつとそつち行きますね」

『ん、分かつたわ』

そう言っつて電話を切つた

「さあ、とりあえず行くか、加速！
能力を使ってさっさと行く」

「……ふう、やっとついたぜ」
そう呟いて、店にはいった

《カランカラン》
「いらっしゃいますー」

「あ、お疲れさまです」
店に入ると初春さんが迎えてくれた

「ん、ありがとう」

適当にかえしてそっぽを向いている佐天さんに謝る
ちなみにいまは、常盤台の制服を着ている
俺が押し倒したときにもとの服がぬれたからだ

「えっと、あの、ほんとうにすみませんでした」
と言つと

「じゃあ、今度なんかおごつてくださいよ」

「そんなんでよければ、いくらでも良いですよ」

「みなさんここは、黒井さんのおごりですよ」
といきなり言つてきよつた

まあこれくらいなら・・・と思つてしていると

「じゃあ私は、この3つを」
と、初春さんを口火に

「じゃあわたしもこの2つ」

「じゃあわたくしは、苺のクロススタータのドリンクセットを」

4人合わせて5800円也

「あつ、ちよつとトイレいってきます」
逃げるために

「逃げないでくださいよ」

《ぎくうう》

「はは、ソナナコトアリマセンヨ」
「なぜばれたし」

「ちよつと、佐天さん見張つてきて」

「はい、分かりました」

完璧に逃げられなくなってしまった

「早くしてくださいね」

「はい」

ああ、どうすればいいんだよ畜生！
と思っっていると

《キィィ》

「え、なんでいきなりドアが？」

《バチツ》

「っ！」

「え、佐天さん？どうしたんですか？」
返事が無いので外に出ると

「っ！なんだこれ？ういてる？」

その瞬間に佐天さんが床に落ちた

まるで支えてた何かが取れたかのように

「っあぶねえ！」

ギリギリで抱きかかえる

すると、佐天さんの顔に・・・

「……いっはー！」

所変わって風紀委員室

「体の方は、大したことなくて良かったね」
「でも、これは」

「おれが、もっとしっかりしていたら！」
「すまない佐天さん」

「黒井さんのせいじゃないですよ
トイレに入ってたんですから」

「ところで、犯人の目星はついてるの？」

「それが、少々厄介な能力でして」

「厄介？」

「テレポーターじゃないんですか？」

「目に見えないんです」

「最初は、光学操作系能力者を疑ったんですけど
とってパソコンをこちらに傾ける

そこには、被害者と思われる女生徒とアンチスキルが映っていた

『わたくし、本当に何も見てません！』

『ですが、監視カメラの映像では・・・』

『それでも！本っ当に何も見ておりませんの！』

《ブツツ ザーザー》

「あっ」

「で、さっきの続きですけど」

「学園都市に光学操作系能力者で、完全に姿を消せる能力者は
47人いますけど、そのすべてにアリバイがあるんです」

「それ以前に監視カメラに映ってる時点で光学操作系は、ないんじ
やないかな」

「それもそうよね」

「あっ鳩」

「鳩？」

「白井さん見なかったんですか？」

「そんなもの気付きませんでしたわ」

「気付かない？」

「あっそうか！初春さんちょっと調べてもらってもいいですか？」

「はい？」

「はい、ありました」

能力名は【ダミーチエック】該当人物は1名でレベルは2です」

「そいつですよ！」

「でも、その能力は自分の存在を完全にけせるほどでは無いと
実験データに書いてあります」

「あー、違うのか 良い線行ってたと思うんだけどなあ」

「う、ここは？」

「あ、佐天さんあんまり無理しな・いで・」

「くくくく、ぷぷ」「くくく」

「は？」

「っアーーーーー!!!」

「くくくくくくくくくくくくくくくく」

「な、なな、ななな、なななな」

「佐天さん、気プツを確かにプププ」

「シヨックよね？いきなりそんなになってたら」

「おWちWつWてWくWだWさWい」

ちなみに今俺たちが笑っているのは、
佐天さんの眉毛が面白く書かれているからである
これは、笑わずを得ない

「せめて、これくらい前髪があれば隠せましたのにね」
白井さんが、パソコンわこちらに傾ける

「こいつだーーーーー!!!」
いきなり叫んだ

「え、それってどういうことですか？」

「今言った通りこいつが犯人ですよ！」

「あなた犯人を見たんですの？」

「はい！意識が途切れる寸前に鏡に映ってたんですよ」

「もしかして肉眼にのみ作用するのかも」

「ふっふっふ」

「？佐天さん??」

「初春！」

「はい!？」

「やるよ!」

常盤台 眉毛事件 中（後書き）

佐天さんが意味深なことを言って
中終了です

次回まで

ゆっくり待ってってね!!

常盤台 眉毛事件 下（前書き）

ふう、セーフだよね

うん、大丈夫だよ

常盤台 眉毛事件 下

「わぁー、すっごいわねー」

「100個でもしないとこの端末じゃ処理が追いつかないんですよ」

「いや、でもこれは、凄過ぎでしょう」

「え、そうですかね？そんなに言われると照れますよ」

ていつかそんな5個くらいのパソコンを同時に使ったら、それは驚くよねえ

「さあ、初春！ドーンといきなさいー」

「はいはい、ドーン」

《ピッピッピッピッ》

「学舎の園の監視カメラ2458台全て起動しました」

「おお、さすが初春！」

「ところで、佐天さん約束のケーキお願いしますよ」

「2個でも10個でも100個でもいくらでもよし！
黒井さんのおごりで」

「わーいー！」

100個って嘘だよね？嘘ですよね？

「多すぎるわね」

「え、そうですね？」

「いやいや、多いとかそういうレベルじゃないよな」

「いや、ケーキの話では、ありませんの 初春E〜HとJとNは、無視ですの」

「は〜い」《ポチツポツポポ》

「あそこは、常盤台から最も離れているから普通の学生は、まず寄り付かないんですの」

「じゃあ、人通りの多い所も後回しね」

「なんでですか？」

「犯人の服装ってかなり目立つと思わない？」

「あ、確かに」

「それにいくらなんでもずっと能力は使えないでしょう」

「なるほど、普段は人目のない所で息をひそめている、と」

「正解」

犯人 side

「それでは、ごきげんよう」

「はい、ごきげんよう」

そう言つて、1人の常盤台の生徒が細い路地に差し掛かる

正確には、1人のイレギュラーが息を潜める危険地域に

(ふふふ、今日2人目の獲m「見つけた」っ!!)

振りかえると、後ろにいつの間にか帽子の女が立っていた

「あたしの可愛い眉毛のかたき取らせてもらつよ」

「っ!!」

とつさに能力発動させて逃げだす

(ふう、危なかった

それにしても何で私の場所が分かつたんだろう?)

「はー、本当に消えた」

『佐天さん！感心してないで追ってください！』

「はいはい、行ってきますよ」

おかしい

さっきからどこに行っても先回りされる

いい加減に能力を使い続けるのも限界が近い

どこかで休まなければ最悪

敵の目の前で能力が使えなくなるかもしれない

そんなことを考えていると

目の前に公園を見つけた

(ちょうどいい、ここで少し休もう

敵が居てもスタンガンでこっそり後ろからやってやる)

少女は、知らなかった

いや、知らなくて当然だった

普通はそんなこと知る機会など無いのだから

だから立ててしまった

死亡フラグを

《キイキイ》

公園に行くとな案の定敵がいた

(ちえ、やっぱりいたわ

能力もきれて普通に見えるけど油断してるし
まあこれでやればいいか)

バチイとスタンガンを少し鳴らす

(ふふ、もらっ「おっと、そこまでだよ
犯人さん」っ！)

後ろを振り返ると3人に囲まれていた

(いや、落ち着きなさい私！

ここであいつを人質にすれば一気に形勢逆転よ！)

おおい！それは死亡フラグだと何度言えればいいんだよ！

b y断じて作者ではない天の声

そう言つて一気に駆けだす

(取つた!!)

だから死亡フラグだつて言つてんだろつがあああ!!

b y完璧に完全に作者では無い天の声

《バチイ》

(よし、とつたああ!)

やめて!もう死亡フラグでおなかいっぱいよ!

b yもう作者でいいや

「えっ!何で!」

「あー、あたしこつというの効かないんだ」

そう言つて御坂さんが目の前で能力を少し使う

そして、そのまま押しつけると

女の子は気絶した

「さして、どんな眉毛にしてやるうか？」

「あ、あのほんとにやるんですか？」

「何言ってるんですか！？やらなきゃだめなんですよ！」

これは、私の眉毛のかたき討ちなんですよ！」

「あっそっそうですよね〜ハハハ」

あまりの気迫に思わず一瞬ひく

「さして、お覚悟っ！ってえ？」

「どうしたんですかってこれはっ！」

俺たちが額を覗き込むと、そこにあったのは

変な眉毛だった

「「はあ？」」

思わず声がそろった

「ん、う、はっ！」

「あんたたち見たのね!？」

「まあ、少し」

「何よ? いいわよ! 笑いなさいよ！」

「やけくそになっっているようだ」

「しょうがないなあ」

「別にそれくらいチャームポイントだよね、佐天さん？」

「え、ああ、うん、そうだよ! それくらいかわいいよ」

「私は好きだな それ！」

「ほらほらこう言ってるし」

「それはチャームポイントだよ」

「え、そんな、・・・本当に？」

よし、落ち着いてきた

あと一押しだな

「本当だよ! ね、佐天さん」

「うんうんそうだよ!」

《ピッ》

「なんだこの旗が立ったみたいなきこえは?」
ま。いつか

「あー、話してたらいつの間にかそろそろ帰らないといけな
いわね

さっさと帰りましょ」

「そうですね、さあいきましょうお姉様」

そうして2人は、帰って行った

常盤台 眉毛事件 下（後書き）

特に何のおちもありませんし

伏線も張らずに帰って行きました

次から、シリアルです

シリアスでは、無いんじゃないかな、うん

幻想御手【レベルアップ】 事件 ? (前書き)

今章最長の事件が今幕を開ける

ゆっくりしていったね！

幻想御手【レベルアップ】 事件 ？

うなああああああ！！

熱いんじやあああ！！！！」

夏休み間っ盛りの暑い日だった

「うっ汗かきすぎてぬるぬるするぞ〜誰得だ〜」

本当に誰得だよ！おれはがっかりだ！

by2回目の登場の作者では、無い天の声

「そつだ！水風呂すればいいんだ

簡単な事じゃないか！ははは

誰得だよ！いや、マジで！

by作者じゃねえつつてんだよ三下ア！

「馬鹿な・・・何でだああ！」

風呂が！風呂があ！壊れてるう！

水しか出ないならまだしも
お湯だけっていいじめだろ

「はあ、しょうがねえ」

そう言っつて、着替えを取りに行く

・・・コソコソ 樂園を我が手に

「うあ、うああ、うなああ」

ゾンビになった気分だ
体が溶けるぞ

これでだめなら俺は、帰ってお湯に浸かってやる

《キィ》

「いらっしやいませー」

「うおっしやー！ー！！」

おっと、がらつがらでテンションがマックスを
振り切って3回転半してしまった
店員さんが、軽く引いていらっしやる

《ばじっ》

「あんたは、何やってんのよ？」

そこには、われらの御坂さんが立っていた

「いや、これはですね

死ぬほど暑いところを歩きまわって

やっと、空いているコンビニに着いたので
テンションがハイになっていたんですんよ
というより御坂さんは何してるんですか？」

「ん、ああ、立ち読み」

言い訳しないなんて男らしいなあ

「っあれは！ちょっとついてきなさい
いいものを見せてあげるわ」

あ、これって死亡フラグ

っていつか相手が上条さんじゃん
これは負けたな

「見つけたわよ！勝負しなさいあんた！」

「おっ、ちようどよかったビリビリ

お前今暇だよな？」

「ええ、時間ならたつぷりあるわよ！

だから、いくらでも相手できるわ！」

「ちようどよかった、ちよつとこの人の駐車場探すの手伝ってくれ
ねえ？」

「は、何ですよ？」

2人が、言い争っている間に

2人の間にいた女性が「暑いな」と

言っていてうちわをしていたので

さっき買っておいた

ヤシの実サイダーを手渡す

「どうぞ、冷えてると思いますよ」

「ああ、すまないね、ありがとう」

なんかこの人目の下のクマが

無かったら、かなりの美人さんじゃないのかなあ？

《トトト》

「こっちこっち！」

「あはは、まっつてよ《ドン》あ、すみません」

あちら、さっきの子供が当たったせいで
飲み物がこぼれてシャツにかかっちゃたな

「大丈夫ですか？」

「ああ、少しシャツが濡れたただけだ
べたべたするが、乾かせば大丈夫だ」

そう言うといきなり服を脱ぎだした

「なに脱いでんですかー!？」

「「は?」「」

「いや、暑かったしなちようどいいと思って」

「そんなこと言ってないで服を着てください!」

上条さんがそう言って服を押しつける

あれ、これって

「え、あの人服脱がせてない？」

「アンチスキル読んだ方が良いかな？」

やっぱりそうなるよな

「いや、これは違・誤解だああああ!!」

そう言って御坂さんに服を押しつける

「ちよつとあんた待ちなさいよ!」

「ああ、その服を持っていかれると困るんだが」

(プルプル)

おお、怒つとる

「はあ、しょうがないわ、行きましようかえーと？」

「ああ、私は、木山 春生だ」

「えーと、じゃあ木山さん行きましようか

あ、あんたも付いてきなさいよ」

「あ、俺ちよつとコンビニに行つて涼んでこないと

「いいわ、あんたがついていかないって言うなら、」

「言うなら？」

「女装させてでもつれて行く！」

「喜んで行かせていただきます！」

め、目がまじだったぞ

御坂 side

「はあ、どうしてこんなことに？」

偶然あいつを見つけたからちよつといいとこ見せてやりたかっただけなのに

？なんで良い所見せようと思ったの？？

そうよ、私はたしかツンツン頭を倒そうとしたのよ、うん！そうよ！

なんだってあいつは、能力が効かないのよ

あ、そうだ直接体に電撃を流し込んでやるわ完璧ね！

74

「あー、そろそろ大丈夫だろうか？」

「へ、あ、うん、だいたい大丈夫です
今渡しますね」

そう言っつて個室の上のスペースから、渡す

「うん、大丈夫だ、ありがとう
すまなかつたね」

「いえ、じゃあ早速探しに行きましょうか」

「ああ、そうだね」

・・・時に君は、あの男性が好きなのかい？」

「ぶふう！！！」

「あれ、当たっていたのかな？」

「違います!!」

バチンと大きな音を立てて電撃が炸裂した

「あれ、一体何が起こったんだ？」

「なんでしょうね？アハハハハ

さ、さあもう行きましょう」

騒ぎになる前に急いで店をでた

幻想御手【レベルアップ】 事件 ? (後書き)

にやにやしたくて書いた

反省はしていない

あ、石はやめて痛いっやめっ

幻想御手【レベルアップ】事件 ? (前書き)

ふおおおお!

PV1万突破しよったあ

ありがとうございます

ユニークも2千行きました

ありがとうございます!

幻想御手【レベルアップ】事件？

「はあ、なんなんだろうあの人の？」

「まあ、変な人だけど悪い人ではないんじゃないかな？」

「それは、そうなんだけどいきなり……はあ」

「え、なんて言いました？」

「いや、なっ何でもないわよ！」

「えっそうですか？」

強引に押し切られてしまった
なんていったんだろう

（そうよ、私がこんなの好きなのじゃない
そう、きっと負けたのがくやしただけよ
あんなの油断しただけよ
今度やれば……）

《コトツ》

「今から手伝ってもらおうお礼だ取っておいてくれ」

「あ、ありがとうございます」

御坂さんはスープカレー（温かい）を手に入れた

「ああ、君はちょうどあれが切れたので

これで我慢してくれ」

主人公はなすび牛乳（火炎地獄）を手に入れた

「「おい！」」

「ん、何だね？」

「火炎地獄ってなんですか!？」

「ああ、温かい、熱い、火炎地獄というふうになっているんだ」

「え、あつつやバツ熱くて辛い！」

なすび牛乳辛い熱い

「なすびには、栄養があるし

それに君、身長が・・。」

《グサア》

「ぐわっ！」

「え、あんたどうしたのよ!？」

《説明しよう!》

この主人公は、実は

身長が御坂さん達とあまり変わらないのだ

チビだね!チービ!チービ!!

「ぐッ、俺はもう駄目だ御坂さん

後は頼んだ・・・ぐふっ」

「何やってんのよ」《ビリっ》

「ひでぶー！」

電撃で気付けとは激しいな

「じゃあ、行きましょ 《ゲゴゲゴゲゴ》 御坂さんなってますよ」

「あそつねちよつとごめんね」

そう言って携帯を取り出した

「ん、なに今ちよつと忙しいんだけど」

『お姉様！まさかあの殿方と！』

「そんな訳ないでしょう人助けよ」

『ま、まさかその人はいきなり脱ぎだしたり・・・』

「よくわかつたわね、でも少し変なだけで別に

悪い人ではないと思うわよ」

『いけませんわ！お姉様！』

その女は脱ぎ「私について何か話しているのかな？」

「そ、そんな訳ないじゃないですかハハハ」《ピッ》

「そうか、ではそろそろいこうか？」

「そうですね、行きましようハハハ」

そうしてベンチから離れて木山さんの車を探しにいった

数時間後

「おお、あの車だありがとう」

「いえいえ、それよりも忘れられないようにしてくださいね」

「ああ、勿論だ、それと私は大学で脳科学の研究をしているから困ったら来なさい」

「じゃあ困ったらいかせていただきますね」

「あと、最後に」

「まだ何かしてくれるんですか？」

「めを閉じてくれないか？」

「はあ、分かりました？」 《パチッ》

《チュッ》

「は？」

「最後のお礼だ

年頃の男子は、こうされるとうれしいと

本に書いてあったからな

では、さよなら」

「は？え？あ、さよなら」

そう言うと帰ってしまった

《バチバチバチ》

「み、御坂さん？どうして電撃を発生させているのですか？」

「うっさいわね！炭にしてやるわ！」

「え、ちよつと、待ってつて危な！ちよつと本気で死にますよ!？」

「うるっさい！死になさい！」

「ふ、不幸だああああ！」

そうして朝まで御坂さんと命をかけた
鬼ごっこをしましたとさ

めでたしめでたし

幻想御手【レベルアップ】事件？（後書き）

木山先生キャラ崩壊

こんな話で、大丈夫か？

やっぱり大問題だ（、・・・）キリッ

連続投稿で頭がおかしくなったと言わざるを得ない

幻想御手【レベルアップ】事件 ? (前書き)

6月1日掲載予定のレベル5で幻想入りもよろしくお願ひします

では、ゆっくりしていつてね！

幻想御手【レベルアップ】事件？

佐天side

「は、やっぱりレベルアップなんて噂なのかな」

佐天涙子その人は寮で噂のレベルアップについて調べていた

「はあ、そんなものあるわけないよね」

そして諦めかけていた時幸か不幸か見つかってしまった

・・・レベルアップが

「え、もしかして見つかった？

…うん！やっぱり本物だ！明日初春にも教えてあげよう！」

「…あと黒井さんにも」

主人公side

「くそっ！やっぱり暑いんじゃないあぁあ！」

いつものように暑がっていた

「やはり恒例の【どきっ 男だけのコンビニ巡り】をやるしか」

《prrrr》

「んあ、電話か？」《ぴっ》

『あ、黒井さんですか？』

「あ、佐天さんどうしたの？」

『あの、いまからちよっといいですか？』

「?いいけど?」

『よかった、初春もいるんで今からちよっと来てください』

「ん、わかった」《ぴっ》

さて、じゃあ着替えないとね

「あ、黒井さんこっちです」

集合場所まで行くと初春さんが居た

… やっぱり花瓶にしか見えねえ

「あれ、佐天さんは？」

「呼び出したのに遅いですよね」

そう思っている初春さんの後ろから佐天さんが現れた

…あれ、このパターンはもしかして

「うううういいいいはあああるううう！」

《バサツ》

その瞬間初春さんのスカートがめくれ上がった

「い！？」

「え、あ、きやああああ！」

「今日は青のストライプか？つて黒井さん！？」

「ぐ、我が生涯に一片の悔いなし！」

「なに世紀末の覇者みたいなことしてるんですか！？鼻血鼻血！」

「とにかくどこかお店に！」

鼻血の勢いで空飛びそうになったっていう

御坂 side

「それで水着も下着も面積はほぼ一緒なのになぜ下着はアウトか、
という話だったかな？」

「違います！」

「ところで、あれは君たちの知り合いかな？」

「へ？」

窓の方を見ると佐天さんと初春さんそして血まみれの黒井がいた

「いや、助かりましたよ」

「こんなところにレバーが売ってるなんて」

「なんで血まみれになってるのよ？」

「いや、色々あります」

「まあいいわ…で木山先生さっきの続きですけど…」

「水着も下着も面積はほぼ一緒なのになぜ下着はアウトか、だったな」

「違います！」

「確かにそう言えばそうですね…」

「あんたもなに真面目に話そうとしてんのよ！」

「ああ、分かっているレベルアップーに関してだろう」

「あれそれなら、今、レベルアップー所持者を保護しているんですよ…」

「へ、どうしてそんなことしてるんですか？」

「レベルアップーには副作用があるんですよ」

「たとえば？」

「そこは分かかってないですよのよ」

「でももしかしたらいきなり倒れるなんてないですよね」

「え、それまじですか？」

冗談っぽく言ったことに佐天さんが食いついた

「まさか、レベルアップー持ってるなんてことは無いですよね？」

「そ、そんなことある訳ないじゃないですか」

強引にごまかそうとしてきたな
やっぱり持つてるんじゃない

黒井の【あり得ないほどの直感】が発動した！
黒井の【口先のペテン師】が発動した！

「さっきの見せたいものってなんですか？」
「う、そ、それは・・・」

(もうひと押しだ！)

「もしレベルアップを使った結果、佐天さんが倒れるなんて俺は耐えられない・・・だから、もし持っているのなら早く出してください、お願いします」

「じ…実は私レベルアップを持っていたんです」

完・全・論・破！

「じゃあ出してしてください」

「はい」《「こそこそ」》

佐天さんは音楽プレイヤーを黒井にわたした

「それで佐天さん」

「はい」

「ぶしつけですが、これ使ったんですか？」

「いいえ、昨日手に入れたばかりで」

「なるほど、じゃあ初春さん、佐天さんは使ってなかった訳ですし

これを渡して丸く収まる、と」

「え、でもジャッジメントとして所持者を…」

「ん、佐天さんはレベルアップなんて持ってませんよ

持っているのは、俺ですよ、そしていま初春さんに渡した」

「え、ですがしかし」

もう一度出番だ

黒井の【口先のペテン師】が発動した！

「ほうほう、つまり初春さんはレベルアップも

持っていない佐天さんを保護したい、と」

「いえ、そうでなくて「そうじゃないなら、元所持者の俺を保護してくださいよ

佐天さんは、持ってないし、おれは初春さんに渡した、違いますか？」「はい」

(これは…なんというか…ペテン師みたいだな)

(そうですね、いつものイメージと一致しないのですの)

(なんか、あれホントに黒井なの?)

何か聞こえるけど聞こえねえ

俺のペテンで佐天さんを救う！

「つまり今の時点で持っているのは、ジャッジメントの初春さんのみです！」

「た…確かにそうですね」

「だから誰もつかまらない、保護されない…そういうことです！」

「ナ、ナンダッテ」

「では、そういうことで」

「は、はい！分かりました！」

完・全・論・破！（2回目！）

「それじゃ、初春さんそれは木山先生に渡して解析してもらってください」

「分かりました！木山先生お願いします！」

「あ…ああ、わかった」

（なんか一種の洗脳っぽいわね）

（ペテン師もここまでくれば立派ですの）

「さあ佐天さん嫌なことは、パーっと食べて忘れましょう

」ココはおごりますよ」

「そうですか、ならこのデザート全部皆で食べましょうか！」

「え！？」

「良いわね！」

「ちよつと、おごるとは言ったけど全部はちよつと…」

「すいませ〜ん、デザート全部お願いします」

「ちよ！？まじで頼みやがりましたよこの人！？」

結局全額払わされた

「うっうっう、俺の財布がこんなにペツたんこに……」

「ふう、1年分くらいのスイーツを食べた気がしますね」

「こんなにパフェ食べたの久しぶりです」

「あゝおいしかった」

「ふう、またダイエットの日々ですの」

「こんなに甘いものを摂取したのは、初めてだよ」

「じゃあ、これからジャツチメントの仕事がありますので」

「さようなら」

「うっぐす、さようなら」

俺のお金ええええ

諭吉いいい

野口いいい

幻想御手【レベルアップ】事件 ? (後書き)

主人公の諭吉をいけにえに発動!

口先のペテン師!

相手は完全に論破される

口先の魔術師には負けるがな!

そして野口をリリースして

直感を発動!

驚異的中率を誇る直感だ!

幻想御手「レベルアップ」事件 ? (前書き)

さて、もうそろそろ総体も終わって

時間に余裕が出来るので更新速度が上がりますよ

では今回もゆっくりして行ってね

幻想御手【レベルアップ】事件？

佐天 side

「はあ、やっぱりレベルアップの事はあれでよかつたんだろのかな」

ある夏の昼下がりに1人の少女は悩んでいた
黒井にはああ言ったがやはり簡単にレベルが上がるならそれに越したことは無いのだ

「でもなあ、そんなずるしちゃ御坂さんに悪いよなあ」

そしてもう一つ、努力でレベル5まで上り詰めた御坂 美琴という少女にも罪悪感を感じるのだ

「うん、やっぱり駄目だよ
そんなズルなんてやっぱりダメダメだよ」

少女がそう決断しようとしたときに事件は起きた

『最近さあ〜レベルアップも値上がりしてさあ10万渡してくんね?』

『そ、そんな・・・分かったよじゃあまず10万返してくれよ』
『《ドガツ》』ざんね〜ん、この10万は前金です
そこで、歯向かったから死刑ね！ハハハ』

(レベルアップ!?)

それは、とても暑い夏の昼下がりであった

続きを書くにあたって、少し前にさかのぼる

黒井side

「ふう、コンビニ4軒目にして収穫ゼロかあ」

主人公のくせに緊張感ゼロである

「よし！静かな細道で涼んでやるぜフフフン」

それにしてもこいつノリノリである

まあそれでも事件は起こる

『ちよつと、やめなさいよ……』

「佐天さん？なんでそんなところに！？くそっあぶねえ！」

言い切る前にすでに走っていた

「うぜえな、レベル0が能力者に逆らってんじねーよ！
死にさらせ！」「てめえがなあ！」「ひでぶ！」

まさに今殴りかかるうとした所に飛び蹴りをぶち込む

「佐天さん！もう大丈夫ですよ！」

「え、なんで黒井さんがこんなところに！？」

「いいから早くどこかに隠れてっ！」

「はいっ！」

佐天さんが隠れるのを確認して敵に振りかえる

「てめえら、覚悟は出来てるんだろっな！」

「カツコイイー！女助けるために自己犠牲なんてほれちゃいそっだ
ぜ！」

「気持ちわりいんだよ！くそ野郎ども！」

轟っ！と走り出した

佐天さんに手を出したくそ野郎どもをぶちのめすために

「俺の力をみs」「うるせえ！」「まそっぷ！」

能力で加速して能力を使わせる間もなく蹴り飛ばす

「なんだあその能力はあみたことねえなあ」

「今からお前はその能力も知らねえ奴に倒されるんだよ、くそ野郎」

加速し、一気に近づきこぶしを振りかぶる

「ぶち殺す！」

加速したこぶしに反応も出来ずに殴られる

はずだった

「ざんね〜ん、ハズレです」

《ゴン》と頭に鈍い感触がかかる

地面に落ちる前に受け身を取り距離をとる

(っ！？確かに顔面に当てたはず、加速したのによけられるはずないし

確かめてみるか！?)

「おいおい、ぶち殺してくれるんじゃないかよ？」

「今すぐやってやるよ、M野郎！」

また、加速して一気に近づいて

今度は腹を狙ってまたこぶしを振りかぶる

《スカツ》と無情にもまた空振る

「ハズレだよ、バ〜カはてめえだ」そげぶ！」

《説明しよう》

主人公は今空振った後

自分の周りに減速の能力を

範囲いっばいに張り巡らせ他後に自分の速度のみを

加速した結果自分の周りの速度のみ減速させるという事だ

うん、分からなかったり読むのがめんどくさければ

飛ばしてくれてかまわない

「ぷはあゝ、同時に能力使うなんて

死ぬかと思っただあゝ

… 佐天さんは大丈夫かな？」

死ぬほど重い体に鞭うつって佐天さんの駆けて行った

路地にふらふらと歩いていく

「佐天さん大丈夫… 《ゴン》 え、な・ん・ん・で？」

ドサツとその場に倒れる

「黒井さん、ごめんなさい…」

そう呟いて少女はレベルアップの

入っている音楽プレイヤーを拾う

「私、どうしても能力者に…」

少女は罪悪感につつまれながら去って行った

夢を現実にするために

「さん…黒井…黒井さん！」

「ん…初…春さん？」

「よかった！気がついたんですね！」

「こ…こは？」

「病院ですよ、黒井さん丸1日も眠ってたんですよ」

「本当ですか!?!？」

はあ!?!一日って眠りすぎだろ

「ところで佐天さん知りませんか？」

昨日から連絡も無しで寮にも帰ってこないし…」

「…初春さん」

「はい？」

「俺はちよつと行かなきゃならない所が出来ちゃったんで行ってきます」

もし佐天さんから連絡があったら俺にも電話するよつに」

「え…分かりました、行ってらっしゃい」

「行ってきます」

「…なんか、頭がすつきりする

なぜ思い出さなかったんだろう

この犯人は木山先生じゃないか…」

携帯を開けて日付を確認する【7月28日】あの事件当日の様だ

（佐天さんをああさせたのが木山先生だけのせいじゃないっていうのは分かってる

けど、この気持ちは全力で八つ当たりさせてもらおう！）

幻想御手【レベルアップ】事件？（後書き）

今回からかなりシリアス分が入ります

シリアスブレイカーは切り落とされました

幻想御手【レベルアップ】事件 ? (前書き)

今回シリアス多めです

ゆっくりしていいってね！

幻想御手【レベルアップ】事件？

「くそっ！もう行ったのか!？」

木山先生の研究所に行ったがもうもぬけの殻だった

「早く行かなきゃ間に合わねえ！」《prrrr》

「電話？佐天さんか？」

と駆けだそうとした所で電話がかかってきた

着信主は【佐天さん】と表示されていた

「もしもし、佐天さん？」

『アケミが、急に倒れて…』

やっぱり、と言ったところだった

レベルアップの副作用は確かに働いた

これはしょうが無いことだが…

『初春が黒井さんにも連絡しておけていって。それで』

よかった、初春さんには連絡済みのようだ

そう安心していると佐天さんがいきなり切り出してきた

『これって、罰なんですかね？』

心配してくれた黒井さんを気絶させてまで手に入れた罰何ですかね

『？』

「そうかもしれない」

『…』

「いくらなんでもいきなり殴られたからね

そこだけは反省してほしい」

『……はい』

「よし、じゃあ少しだけ眠るけどその間に反省しててね
本当にあつという間だからちゃんと考えててね」

『本当に少しって?』

「原因を俺や御坂さんや皆で全部終わらせてくるから」

『え、それって?』

「だから言い訳でも考えて眠っていていいからね」

『…ありがとうございます』

「それじゃあゆっくり眠ってて、起きたらお説教だから覚悟しとい
てね」

『じゃあ言い訳、考えておきますね』

「おやすみ、佐天さん」

『おやすみなさい、黒井さん』

ピッ、と短い電子音を鳴らして電話を切る

「さて、全部終わらせてきますか」

轟、と音をたてて一気に加速する

「覚悟しろよ、木山！」

木山 s i d e

「さてこの能力、試させてもらおうぞアンチスキル！」

様々な能力を行使してアンチスキルを蹴散らす

「はあ、所詮はこの程度か？

温過ぎるぞアンチスキル！」

「じゃあ素敵な電流はどうかしら？」

その瞬間に目の前に電流が走る

「学園都市が誇るLV5がこんな所に何の用だ」

「あんたを止めに来たのよ」

「そうか、なら全力で排除するまでだ」

「そう簡単にはいかないわよ」

まず激流を相手に押し付けるがそれを軽々回避される
そして電流をカウンターとしてはなたれる

「これでどうっ！？」

「その程度何の問題にもならんな！」

電気誘導のバリアで電撃を回避する

「1v5と言ってもこの程度か？失望したぞ」

「っ！電撃を攻略したくらいで！」

砂鉄を集めた剣による攻撃が来る

「ほほう砂鉄の剣か？面白い、が足元に気をつけなさい」

敵の足元を崩してバランスを崩させ、アルミを爆弾にして爆破する

「これで終わりか？1学園都市が誇るv5も呆気なかったな」

そう呟いてそこを後にしようとした時

「…待てよ」

声が聞こえてきた方向を見るとさっきの少女をゆっくり地面におろしている少年がいた

「なんだ君も来たのか。まあいい、引いてくれないか？

ココにアンインストールチップもある、誰も犠牲になんてしない」

そう言っつてチップを見せながら説得していると

「…ち…ける…よ」

「ん、何だ聞こえんな？引いてくれな「ふざけんなって言ってんだよ！

てめえ散々人を傷つけておいて『誰も犠牲にしない』だと…人をおちよくるのも大概にしゃがれ！！！！」

少年は吠えたかと思うとこちらに真正面から突っ込んできた
この私を倒すために…

主人公 s i d e

「しやがれ!!!」

そう吠えて真正面から木山に突っ込む

「威勢はいいがその程度では私は倒せないぞ」

「だからこうするんだよ!」

木山が衝撃波を撃ってきたのと同時に加速して突っ込む
そして振りかぶり殴る、が

「!?!」

「だから言っただろうその程度では私は倒せないと」

超能力で作られた壁に防がれる

「っ!それならっ!」

今度は木山に減速をかけて反応速度を遅らせようとする

「無駄だ」

しかし演算の途中に攻撃されて能力射程から離される

「やはり無駄だよ。君の能力には応用力が足りない」

「言ったな！」

ならば、と今度は加速させた小石を投げる

「応答してきたか、だがまだ足りないな」

今度も壁に防がれる。でもこれでいい

「さて、そろそろ体があつたまつてきたかな」

「言い訳かい？らしくないね」

「言い訳かどうか確かめてみるよ」

足の速度を加速して思いつきり地面をける

すると道路は蹴りを入れた場所を中心に大きな穴が開いた

そして木山も体制を崩して下に落ちていく

「ほう、まさかこんな芸当まで出来るとは」

そして着地の瞬間をねらって加速させた小石を投げる

「無駄だと言っているだろう」《ぎゅっ》

「つかまくえた」

「なに！？」

壁にはじかれたと同時に木山の後ろに回りこみ
後ろから抱き締める。そして

「黒井流スペシャルハイパーバック・・・」
「くっ!？」

木山が能力により槍を作り出すのもう遅い

「ドロップ!!!!!!」

能力による加速も合わさりとてつもない威力のバックドロップが木
山に炸裂した

「はあ...はあ、なんとかやったかな」

いい感じに入ったし大丈夫だろう

「黒井!」

あれ?なんかお呼びのようだ

「はい、御坂さんどうしたんですか?」

「後ろ後ろ!」

「へ?」

後ろを振り向くと胎児のようで、それでいて圧倒的な威圧感を持つ
化物が
濁りきった白い白い球体をその

「え、AIMバースト!？」

その瞬間に視界が真っ白になった

幻想御手【レベルアップ】事件？（後書き）

く、黒井イイイイい！！！！後ろ後ろ！

定番のネタの餌食になった黒井は無事なのか？
そしてアンインストールチップは無事なのか？

次回に続く！！！！

幻想御手【レベルアップ】事件？（前書き）

スーパー言い訳タイム

その…あの…データが消えてマシテ・・・
いや、ホント暇つぶしになんねーぞくそ野郎！とか
さっさと書けよカス！、とかの批判もしょうが無いとは
思っんですけど、え、『言い訳が長い』、ですか
そ、そうですね！じゃあ始めますね

ゆっくりしていったね！！！！！！

幻想御手【レベルアップ】事件？

御坂side

「は！？なによ、あの化物？…そんなことより黒井は！？」

さっきのレーザーから少したち、辺りの砂煙が晴れるとそこには…

「黒井つ！！！！」

ポロポロになつた黒井がいた

黒井side

「う、いった」

くそ、あの化物め、爆風だけでこれとか洒落にならねえ

…ちなみに発射される前に近くの石に躓いて横にそれたからである
何とかよけるんじゃないやなくて躓いただけってかつこ悪いなあ

「あれ、御坂さん、もう起きたのか？」

なんか御坂さんが叫んでる、じゃあとりあえず
「行ってみますか」
体に力を入れて何とか走っていった

御坂 side

「よくも！よくもおおお！」

次々に放つ電撃はすぐに再生される。でも、そんなのかまうか！
よくも、「よくも私の友達殺したなああああ！」

全力の電撃もやはりすぐに再生されて、その場に膝をつく

「なんで、なんで、黒井を殺したのよ……」

そう呟いているとこちらに向けて、レーザーを放つが、下を向いているために気付くのが遅れる

(やばっ、回避が間に合わな) 《ズドン》

私の居た道路にレーザーが突き刺さった

黒井side

御坂さんの居た道路にレーザーが突き刺さった

道路にな！！！！

てな訳で、「御坂さん、大丈夫で《ドガッ》ア、アア、アンタ何してんのよ！？」な、何がでせう？」

注意されたので状況を見る

《今の状況》

俺が御坂さんの膝の裏と背中に手をあてて抱きかかえている

…まあ、俗に言うお姫様だっこだ

「すみませんでしたー！！！」

「だが断る！」

こ、こごうなったら

スーパー言い訳タイム

「そう、この格好は、つまり、そう！孔明の「いいからおろして！」
…はい」

まあさすがにこのまま抱きかかえてるのもね

「でもどうすんの？電撃も流されるし、一瞬で再生されるし」
「そこで、俺の能力で再生速度をほぼ停止まで追い込みます」
「あんなでかいやつへの演算なんて時間がかかるでしょ」
「だからこれを使っんです」

そつと懐から音楽プレイヤーを取り出す

「っレベル…アッパー!？」
「これで一気に演算時間を短縮します」
「…副作用があるんでしょ？」
「だいたい一日くらいで眠るはずですよ」
「今は何があるか分からないじゃない！そんなのさせられないわよ」
「！」
「いまはそれ以外ないはずでしょう!？」

少し強く言い放つ、悪いけどこれ以外に方法が無い

「っ!…じゃあ約束して、この戦いが終わったら
皆でケーキを食べに行くこと、そして全部あんだのおごりだからね
！」

「約束します、絶対に」

これはフラグでも何でも無い、正真正銘の約束だ
破る訳にはいかない、何があるうと

「じゃあ、聞きながら行きましょう」

「分かったわ」

そう言ってイヤホンを耳にセットして音楽聞きながら走り出した

A I M バースト 付近

「さてと、じゃあ化物退治と行きますか」

「で、手はず通りに私がひきつけながらあんたが演算をするのね」

「だいたい、演算は一分つてところですね」

「じゃあ、行きましょか！」《バァン》

御坂さんの電撃を合図に化物退治が始まった

電撃に気付いていなかったAEMバーストの腕がちぎれた
しかし、一瞬で再生されて御坂さんに攻撃を開始する

「さて、ここからが俺の出番ってわけだな」

手はず通りに演算を開始する

この演算にほぼすべての脳の機能を利用する事によって
限界まで時間を短縮する

「一分間もってくださいよ、御坂さん」

そう呟いて、目の機能も演算に回し、完全に演算に集中した

御坂side

「はあ、まったく疲れる役回りよね」

飛んでくる攻撃を躲し、砕き、時にはこちらから仕掛けなければ
ならない

しかし泣き言も言ってもらえない、アイツの1m付近から
切れたら、その瞬間にすべてがオジャンになるのだから

「しかも全力の一発分は電力を残せ、だなんてスパルタよね」

最後の切り札が無くては、どんな勝負も勝てないんだから

「頼りにしてるわよ、黒井」

そう言ったところで、化物がいきなりこちらとは逆方向を向いた

「そつちは…黒井いい!!」

駄目だ、あいつは演算に集中してるから、くそつ、間に合って!

全力で走るのをあざ笑うかの如く、もうすでにレーザーは発射寸前の様だ

駄目だ、今度こそ直撃するっ!諦めかけたその時

「演算、終了」

化物の動きが遅くなる、そして

「御坂さん!速く!!!」《キシヤアアアツアアア》

黒井が叫び、化物も苦しみます、そして私はコインを取り出し、

「こんなところで苦しんでないで、とつと元の居場所に帰りなさい」

全力のレールガンで化物をあとかたもなく葬り去った

黒井side

「やった、やったあああ！」

緊張の糸が切れてテンションが振りきれ

「御坂さん！やった、やりましたよ！さすがLV5！」《ドサッ》

しかし、駆け寄っている途中で御坂さんが倒れる

「み、御坂さんどうしたんですか！？」

「で、電池切れ。文字通りに」

話を聞くと体内の電気をつかい果たし動けないそう

「じゃあ、おぶっていきましょうか」《ぽふっ》

「ちょ、ちょっといきなり何してんのよ！」

「はっはっは、電気が使えない御坂さん等怖くないな！落ちないよ
うにしっかりつかまっててくださいね」

「ふざけんなー！おろせー！」《ぽっぽっ》

「はは、きかなあ、行きますよ！」

ゆっくりゆっくりと御坂さんを抱えて歩いて行った

幻想御手【レベルアップ】事件 ? (後書き)

シリアス書くのめっちゃ疲れるんです

ちなみにこのAIMバーストは未完成なんです

だって、佐天さんがつかってから1日しか経ってないもの
ごまかしじゃないですよ

幻想御手【レベルアップ】事件 ? 後日談のよつな何か(前書き)

ふっふん、こいつは後日談だ!!

読みたくない人も読んでやってね!

幻想御手【レベルアップ】事件？ 後日談のような何か

何とか御坂さんをおぶって鉄橋まで行くと黒子さんが待ち構えていた

「お、お姉様？なんでそんな幸せそうな顔をして背中に…くううろ
おおおいいいいさああん」

（な、なんで俺が責められてるんだ、み、御坂さん…完全に寝てやがる）

「ふふふ、ぶ・ち・こ・ろ・し・か・く・て・い・ね」

（ちよつとおおおお！それ違う人の口癖エエエエ！）

心の中で突っ込むと同時に襲いかかる黒子さんから御坂さん（の貞操）を守ると言う
ミッションが開始された

「ぐ、ハアハアつくなんてしぶとさですの？」

「ぐ、御坂さん（の貞操）は俺が守る！」

「ああ、君、少しいいかね？」

「え、何でしょう？」

そこには先ほどまで戦っていた木山先生が居た

「先ほどの発言、すまなかつたね」

「いいや、もう全部終わったしもういいですよ」

「あと、その少女にはどうあがいても絶望の運命しかないと「そんなことにさせませんよ」「え？」

「絶望？そんなもんはあり得ないですよ。何があるうともそんなことさせません」

「ははは、凄いな、さっきの発言は撤回する。すまなかった」

そういつて、頭を下げながら連行されていく

「しかし、それを実現するのなら、今よりもっと強くならなければ不可能だ。

それこそ学園都市最強くらいはな。ではさらばだ、少年頑張れよ」

そして木山先生は連行されていった

「学園都市、最強か…」

多分木山先生の言っていた事はあのおくそつたれな計画の事だろう。確かに一方通行を倒さなければまず不可能だろう、けど今は

「黒子さん！御坂さんから離れましょうか！」

この平和な日常を楽しませてください、木山先生

病院

病室に行っても佐天さんが居なかったので、とりあえず屋上に行くよ

「あ、黒井さん」

佐天さんがのんきな声で話しかけてきたので

「さ、て、と、ちよ〜つと O H A N A S I I しましょうか」

お説教タイム、スタートだドン！

「ひっ！は、はい、お手柔らかにお願いします」《ビシッ》

ありゃりゃ、正座して目までつぶってるよ、どんだけ怖いことする
と思ってるんだよ〜しよ〜うがないな
少し傷ついてから、親指で中指を抑えるようにして右手を突き出し、

「反省しなさいっ！」「《ピンッ》」「いたっ！」「

デコピンをした

「さてと、じゃあお話終了、次から皆を頼るよつに」
「え、たったそれだけですか？」

佐天さんが呆気にとられて質問してきたので

「しょうがないな、そこまで言うならもう2、3発「いいです！遠慮しておきます！」よし、じゃあこれから心を入れ替えて、皆に頼るように！」

…佐天さんの周りには凄い人がいっぱいいるんだから、ね！」

そう言っつて子指をたてて、ぐつと突き出す

「？何ですか??」

「指きりだよ、約束してくださいね、困った時は皆を頼ること！」

「は、はい」

佐天さんが子指を出してくれたので、指切りをする

「「ゆびきりげんまん、うつそついたらはりせんぼんのますつ指切った！」」

「…じゃあ、佐天さん、言ってくればだいたい協力するから遠慮なく頼ってくださいね」

「じゃあ、早速ひとついいですか？」

「どうぞ、何なりと」

「じゃあ目、つぶってくださいます？」

「へ、あ、はい」

何か変なお願いのせいで間抜けな返事をしてしまった

(ゲームとかならここでキスでもしてくれらるんだらうけど、

ま、まさか、さっきのデコピンのお返し！そんな、さすがに！)

ピンタを回避するべく全力で目を見開くと目を瞑って頬を染めている佐天さんの顔が

「佐天さん！？一体何を！？」

「なんで目を開けるんですか！？」《ベチン》

「ウロボロスッ！！！」

そのまま意識を手放した…

病室

「ハッ！俺は一体！？何かやってしまった感じがするぞ！？」

「それは夢です」《ゴン》

「またかよっ！ぐふっ…」

そして意識を手放した

病室

「また、気絶した気がs」気のせいです！」《ズコン》もついや！」

無限ループって怖くね？意識を「手放すかああああ！」

「そんな！？なんで！？」

「ふふふ、寝顔が安らかですね、子供みたいにかわいい」

生と死のはざままで彷徨ってます、つまり死にかけてです

「誰も、居ないよね」

念の為に周りには誰もいないことを確認する。そして

「じゃあ、さっきの続きを…」

「ん、俺は何を…?」

「何回目ですか!？」 《ドガス》

「ゴツハツ、またかよ…」

この繰り返しだけで面会時間が過ぎたという、残念残念

幻想御手「レベルアップ」事件？ 後日談のようないつか（後書き）

この残念な感じの主人公、フラグが立ってもなにも出来ないっていう。

しかも合計30針も縫ってます、まじ不憫

第15話 平和…素晴らしい(前書き)

遅れたのはテストがあったからです

誠に申し訳ありませんでしたm() () m

第15話 平和…素晴らしい

「くっ!? まだだ! 右腕くらいくれてやる!」

たとえ右腕が折れようと、戦わなければならない! 俺たちの日常の為に!

「超減速フィールドが破られた!? くっ! どうすれ!」ピロリロリン
《なんですかあ?

今やっと、ボス戦なのにい」

f r o m 佐天涙子

件名 約束の

本文 今暇ですか?

暇なら私の部屋に来てください

お待ちしておりますm) ((m

「ナ、ナンダッター!?!」

お、お呼ばれ! これは、フラグがたったのか!?

悪魔『そうだ! ついにフラグが立ったんだ! 良かったな』

き、君は俺の中の悪魔！？そ、それは本当なのか！？

天使『ふふふ、何言ってるんだ、お前みたいなヘタレにフラグなんて立つはず無いだろ？

釣りだよ、釣り。言ってること分かる？』

うん、僕の中の天使君、君ちょっと表に出ようか？

悪魔』と言うか、この文面なら確定とは行かないものの、前回でキスされそうになってたじゃないか？jkjkjk』

そっかぁー、えへへへえへ

天使『落ち着くんだ黒井！お前みたいなド変態にほれる人なんていないよ！』

てめえ、マジでぶん殴るぞ…

天使『それに君は今そんなことしてていいのか？
シスターズ
妹達はいいいのか！？』

そうだった…俺には今そんな事している時間は無いよな…？

そう思つてメールの返信をする

f r o m 黒井

件名 RE：約束の

本文 すまない佐天さん！

今日はちょっと色々忙しいからいけないんだ！

この埋め合わせは必ずいつかやるので、今回はパスでお願いします

「よし、送信つと」「《ピロリン》」

さあ、シスターズを救うための作戦を考えようか

脳内会議タイム

とりあえず立ち位置

A 〓 主人格、常識人っぽいポジション

B 〓 いい子、お世話やき

C 〓 博士ポジション、常識に囚われてはいけないのですね！

A 「まずはどうやって一方通行を倒すか…だな」

B 「じゃあ《ピロリロリン》メールか、取るがいいさ」

A 「すまん、どれどれ？」

f r o m 佐天さん

件名 じゃあ

本文 女・装・決・定・で・す・ね

B「諦める…：しょうがないんだ…：多分次はセーラー服だ」

A「は、離してくれ！

そう何回も女装ばっかりしてられるかあああ！」

B「しょうがないんだ！作者がシリアスを書けないの知ってんだろ
！」

A「やめろおおお！もういやだあああ！誰得だよおおお！？」

俺得ですby作者

A「てめえ！ホントにいい加減にしゃがれよ！どんだけ女装させた
いんだよ！？」

B「そんなことより会議だ会議！御坂さんに辛い思いさせたいのか
！？」

A「そ、それもそうだな。まずはあの【反射】だな」

反射、無意識でも常時展開されているほぼ無敵の防御

それを原作では、

B「イメージブレイカーか、木原神拳で打ち破ってるな」

A「まあ、イメージブレイカーは無理だとして、木原神拳かあ？
どっちも無理なんじゃないか？」

B「まあ、反射の有効範囲がわからんからなあ。四肢全て投げ出しても分かるかどうか？」

C「ふっ、そこからは俺に任せろ！」

A、B「お、お前は博士ポジションの黒井C！」

C「まずは他の物で有効範囲を試すか？石を投げつけるとか…もしくは、ゴニョリゴニョリ」

A、B「ナ、ナンダッテー！！??」

A「でもその作戦は、大前提が必要じゃないか!？」

C「大丈夫！そこは最終手段に木原神拳があるんじゃないか！
…では早速シスターズを探しに行こうか」

B「お、おい！本当にそれで大丈夫か!？」

C「大丈夫だ問題ない！」

A「いやいやいや！木原神拳って俺やったこと無いぞ！どうするんだ？」

C「何言ってるんだ？そこは俺とBで考えとくからお前はシスターズを見つげるんだ…いいな？」

A「それはつまり、同時に3つの事を考えつつ行動しろってことか？キツイ仕事だな、まっしょうがないか」

C「シスターズに比べればそんなの造作も無い事だろ、頼んだぜ」

脳内会議終了のお知らせ

「とは言ったものの野外の実験なんて昼間からやってる訳無いしな
どうしよっかな、脳内会議に参加してもいいんだけど…」

とりあえず夜まで体力を温存しておきたいし…

「おやすみなさい」

寝ることにしよう。つき起きたらそこは非日常の世界か…死なない
様にだけしておこう絶対に

第15話 平和…素晴らしい(後書き)

一方通行さんの能力についてオリ設定が含まれる予定なので
ご注意ください

ちなみに黒井さん寝てますけど一応他の人格(笑)はなぜか起きて
います

作者のご都合です。誠に申し訳ありません

乱雑解放【ポルターガイスト】 ? (前書き)

シスターズに行く前に絶対に通らざるを得ない道なのさ！

…嘘です、書きたかっただけですよ！

ゆっくりしていったねー！！

乱雑解放【ポルターガイスト】？

何の収穫もなく3日後

A「 で、3日間調べた結果何も見つからなかった訳だ」

B「 ああん、だらしねえなあ！？おい！」

A「 そ、そう言うそっちは木原神拳はいけそうなのかよ？」

C「 うむ、今のところ検討中だな」

A「 ヤッパリネ」

B「 いやいや、やっぱりプランBに変更した方が…」

C「 やめた方が良いと思うぞ、あまりにも時間がかかり過ぎるその間にやられる危険性が高い」

A「 そんな事よりさ、シスターズは一体どこにいるんだ？」

B・C「 W A K A R A N ! (断言)」「」

A「 おまいらエ…どうすんの？場所も分からなきゃどうしようもないじゃん」

D「 そこは俺に任せな！」

A・B・C「お、お前は第四の人格（爆）！？」

Dさんの設定をどうぞ

カッコつけ、厨二病、馬鹿、と色々残念な方

D「ふつ、簡単な事じゃないか…この事件は学園都市の暗部が関係している。

だからそう言うのは詳しい人に聞こうぜ！」

A「その発想は無かった
でもさ、誰に聞かって言うんだよ？」

D「そこは考えてない！」

A「おい！てめえ結局無策と同じじゃねーか！」

B「おまいら、よく聞け！そして崇める！」

A「お前までボケに回るんじゃないやねええ！」

B「まあ聞けよ。

暗部組織のアイテムって覚えてるよな」

A「ああ、滝壺さんね、覚えてる覚えてる」

いつも地味なジャージに身を包んでいるけど
以外と着やせするタイプのお方だね！（浜面談）

B「お前どんだけ滝壺さん好きなんだよ・・・」

で、アイテムは行きつけのファミレスがあったな」

A「なるほど、つまりそのファミレスでアイテムから情報をもらうと。」

「ってちよつと待てやあああ！どうやってそのファミレス探すんだよ！
一軒一軒探してたら何日かかるんだよ!？」

B「俺たちが何回【どきつ 男だらけのファミレス巡り】をしたと思ってるんだ！

俺はお前を信じる！だからお前を信じる俺を信じろおおお！」

A「そ、そうか！今まで何十何百という数のコンビニの中にあの人達はいなかった！

…ってもしその時来てなかっただけならどうすんだよ?」

B「それでも！何もしないよりマシだ！

このまま指を啜えて待ってていいのかよ!？」

A「…ありがとう、目が覚めたよ。行ってくる」

B「行つて来い、こっちは任せろ」

脳内会議終了のお知らせ

「とりあえず、服着ようか」

装備 シャツ、パンツ

選択肢 1Tシャツ、ジーンズ うむ、普通の装備じゃな。安定感

があるぞ

2 冬服制服 え、暑くね？着るの？馬鹿なの？死ぬの？

3 メイド服 ハアハア、ハアハア、グラビトン事件以来な
んだな

「こんな絶対おかしいよ」

とりあえずTシャツとジーンズを着ようかな

《ピンポン》

「何だ？こんな時間に客か？」

とりあえずズボンだけでも履いてインターホンのカメラから覗くと
其処には佐天さんがいた

『ども、黒井さんいますか？』

俺は知っている、経験則で知っている。

佐天さんたちが家に来た場合基本的に女装させられる
つまり、俺がとる行動は…

「中には誰もいませんよ…」 《ぶつつ》

…戦略的撤退（居留守）だ

これで諦めない奴なんて《ピンポン》くっ!?

まだ諦めないのか？しつけれ、だが俺は負けん《ピンポン》

『あけてよ…圭一君…ねえあけてよ…』
「ヒイイ!? 違います! 人違いですうう!」

《シーーン》

「あ、あれ、ついに居なくなった…? やった、やったおお! 勝った! 勝ったんだ!」

勝利の雄たけびを揚げ、自分の貞操の安全を実感する
じっちゃん、俺やったよ。これで《かちやり》かちやり…?

ギギギ、と言う効果音が出そうな速度で玄関に目をやる

「よつす、来たわよ」

「なんでそういう事するんですかああああ!?!?
馬鹿なんですか!?! それともいじめ何ですか!?!」

どうも電子ロックを力技で外したらしい。壊れたらどうするんだ!

「さて、そんな事より居留守使うなんていい度胸じゃない?
覚悟、出来てるんでしょうね」《バチイ》

「御坂さん、そんな事より恒例の女装タイムの方が良いですよ!」

「おい! 佐天さん今【恒例の】って言いました!?!?
いいましたよね!?! 恒例になんかせませんよ!?! 絶対に!」

【キングクリームゾン】!?!

「くっ!?!?どうしてこうなった?」

「女装させるといふ過程を消し飛ばし、女装させたという結果だけを残す」

装備 ジーンズ Tシャツ ビフォー

装備 セーラー服 アフター

「さて、じゃあ行きましょうかね?」

「い、逝く!?!?あの世にこの服装で行くんですか!?!?
いじめかつこ悪いですよ!」

この服装で逝くなんていじめすぎる!人権侵害だ!

「何言ってるんですの?今日は初春の所にルームメイトが来るから皆で歓迎するだけでしてよ」

「それなら別に女装しなくても…」

「甘い!甘すぎですわ!」

「この時期に転校するなんて何かあるに違いない!」

「だからこそ、可愛い姿で迎えてあげようと言う優しい心遣いなんです!」

「嘘だ!嘘だ!!!嘘だああ!?!?!ただ女装させたいだけなんですし

「ようが!？」

「「「正解」「」」

「ふざつけるな!どんな理由を並べても!

どんな理屈で片付けようと!俺が女装させられて言い理由にはならねえだろうが!」

「それがそうでも無いんですよ!わざわざ初春の所に

引越させるあたり、絶対に大人しい子とか、人見知りする子だと思っんですよ」

「TE N A W A K E D E !同性なら接触しやすいと思うんです!」

「それとも怯えさせたいんです?そんなので良いんです?」

「ぐはっ!!!き、汚い!人質を取るなんて!」

黒井の精神は300ダメージを受けた

「汚かるうが何だろうが、それは転校してくる子を思っての事なのよ!」

「ぐううう!」

さらに精神に200ダメージ!

「さあっ逝きましょつか!」

「やっぱりその字じゃん！？嫌だああ《ドスツ》ごふっ！ひ、人殺
…」

「正義の為ですわ。堪忍して下さいですの」

後ろから白井さんに殴られて俺は気絶した…

初春さんの部屋

「はっ！ココは！？」

「あ、気がつきました？私の家ですよ。黒井さん散々でしたね」

起きた途端初春さんが心配してくれる…のは良いんだけど

「なんで携帯持ってるの？」

「いやちよつと寝顔が可愛かったから写メ撮ってたとか言う事は無いですよ」

「とってたんですね！？酷い！苛めだよ！」

そうやっているとおから知らない子が現れた

「あれ、起きた…の？」

「あ、おかげさまで」

「それは良かったの…」

「おっ！黒井さん起きたようですね」

「ひっ人殺し！今度は何する気だ!？」

奥から白井さん達が出てきたので今度はやられない様に身構える

「心配しなくても何もしませんわよ」

「ほっ本当にですか？本当にですね!？」

「大丈夫ですよ！少しは信じてくださいな!」

「「ええ」」

「なんでそこでお姉様までそんな目で見るとは!？」

「「だってねえ」」

「黒井さんも八モらないで下さいな!」

ニヤニヤ（ ）しながらさっきの仕返し（御坂さんは曰「る」の）
をしていると

「まあいいや、皆で春上さんの歓迎の印に町に出かけよう」

「あ、良いですね！行きましょ」残念ですけど、昼から会議でしょ

う？ 忘れたんですの？」「あ、うう
そうでした〜」

「後は私たちに任せときなつて、初春」

「佐天さん！ 冗談でも春上さんのスカートめくらないでくださいよ
！」

「なんで私がそんな事するの？」

「「え！？」「」

予想外の答えに初春さんと共に声をこぼす

「えっ私そんなことしませんよ」「私以外にはですか？」「まあそうと
も言っわ」

「なんでそういう事するんですか！？」

「いや〜やっぱりさ、親友として初春がちゃんとパンツはいてるか
気になるじゃん！」

「穿いてますよー！」

「ハイハイ、もう良いから会議に行きますわよ」《がしっ》

「あ〜皆さんさよ〜なら〜」《ズルズル》

初春さんが白井さんに連れられてログアウトしました

「じゃ、いきましようか」

「あの、やっぱりこの姿で…?」

「「もちのロン4000オール!」」

「やめて〜」《ズルズル》

「何か知らないけど哀れなの…」

春上さん、そう思うならこの異常な腕力の2人を止めてください

少女s（一名男の娘含む）移動中・・・

「さっきのテロップに異議を申し立てる!」

誰が男の娘だ!?俺は健全な男子高校生だぞ!

「あの人何してるの…?」

「気にしないで春上さん、アイツ偶に変になるだけだから。

あと、あそこのクレープでも食べない?おいしいのよ?」

「あ、あそこって確か最初にあたしたちが会ったところでしたね!」

「じゃあ、そこに行ってみたいの…」

ハイハイ分かったよ、これで良いんだろ

少女s移動中…

「おい！今度は俺が入ってないぞ!?!」

入ってるよ、…少女枠で

「ぶちころしかくていね」

おい、それ散々お前が突っ込んでたや《ボン、ガン、ズドン、バババ》ごはあ!!

ナレーター1がログアウトしました(この世から)

「あれ、皆さんいいもの食べてますね?」

「あ、食べます?チョコバナナですけど?」

「いやいや、流石に女の子からもらうのさあ

とりあえず買ってこよつと」

ナレーター1に代わりましてナレーター2が御送りいたします

そんな感じでとりあえず作戦：ノリを大事に！でアンチヨビブルー
ンなるものを買ってみた

「アンタ…何そのセンスは無いわ」

「俺だつてわかってます！やり過ぎましたよ！無難に苺とか選べばよかつたなんて！」

今更後には引けないとおもい、全力でかじりつく、すると…

「ゴハア！」

「黒井さああん！？」

クレープ（笑）その場で吹き出してしまった…
やっぱり気合いだけではどうしようもなかったよ…

「そんなにまずいの？どれどれ一口…《パクッ》」御坂さんやめろ
おおお！」「ふむふむ…」

中はニチャニチャしつっ酸っぱさもあって…ゴボツ！？」

御坂さんも嘔き出したようだ。やはり誰も食べられないのか…？

「私が…私が食べます！」

「やめるんだ佐天さん！そいつはレベルが違う！死にたいのか！？」

「そうよ！駄目！そいつは人の食べるもんじゃないのよ！！」

「それでも…それでも私が食べないと！」

「こゝこれはどーいうのノリなの…？」

「駄目だっ！やめろおおお！！《パクツ》「あれ、そこまで変な味じゃ…オゴパツ！！」
畜しよおおお！！佐天さあああん！？」

俺の目の前でまた儂い命が散ってしまった…俺には何もできないのか！？

「ふふふ、大口叩いてこの様ですよ。もう、私はダメです…すいません…《ガクツ》」

そう呟いて佐天さんは気を失った

「佐天さん！？佐天さあああん！？くっ！なら電気ショックで…」

「駄目だ御坂さん！今起こしたら味のフラッシュバックが！」

全力で御坂さんを止める！佐天さんは立派に戦ったんだ！
それは戦士に対する冒瀆だ！

「いったい私はどうすればよかったの…？」

そして春上さんだけが取り残されていた…

乱雑解放【ポルターガイスト】 ? (後書き)

嘘みたいだろ…

佐天さんだけさ、アンチヨビとプルーンに辿り着いたんだぜ

このクレープはスタッフが死にそうになりながら頂きました

ナレーター1『いやっ！無理だろ！？』

黒井『早く食べよ！こんなもん食えるか！』

ナレーター1『そんなもん食わすなよ！？うわバカやめっ(むぐむぐ)ドベルベルグ！？』

黒井『まだ残ってるぞ、さっさと食べよ』

ナレーター1『やめてくれ、これ以上は流石に…(パクッ)クルペツコー！？』

そして悪は去った…

乱雑解放【ポルターガイスト】事件 ? (前書き)

遅れた理由と言う名の言い訳

1 . テスト期間なう

2 . もう片方の奴に精を出し過ぎたあごう

3 . こま け え こと は「だが断る！」 《ガスげしゴンバ
ン》

ゆっくりしてっいってね

乱雑解放「ポルターガイスト」事件 ？

「う、ぐぶ、げぼ」

「黒井さん、大丈夫ですか？やっぱりあっちで休んでた方が…」

「だ、大丈夫ぐぶっ」

「大丈夫じゃないじゃないですか！？早く行きましょう？」

さつき復活した佐天さんが結局全て終わらせた俺をいたわってくれ
るが

それでも俺はここでリタイアすることはゆるぎはつ、ま、まだだ
！まだ終わるわけには

「くっがっだあああああああ！！」

「な、精神が体調を凌駕した…！？」

「あんたたち、さっさと来なさいよ…」

そんなバカなことをやっているとお呼びがかかった

「じゃ、行きましょうか佐天さん？」

「ホントに大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

佐天さんの手を引いてゲームセンターに入って行った

ゲームセンター内部

「何で初春さんがぶつくさやってるんですか？」

「いいんです…私なんて…私なんて…ブツブツ」

初春さんがUFOキャッチャーの前で体育座りでブツブツやっていました。

なんか怖いな…

そう思っていると、春上さんが小さな声で事情を説明してくれた

「初春さん…私の為に景品を取ろうと…でも取れなくて…必死になつて…」

「そんなに難しいんですか？」

「やってみるといいの…」

レックプレイ、UFOキャッチャー！《チャリーン》

ウィーン（クレーンを動かす音）

がしっ（ぬいぐるみを掴む音）

ポトッ（ぬいぐるみをゲットする音）

「あつ取れた…」

「あんたはどんだけ空気読まないのよ!？」

だ、だってこんなに簡単に取れるなんて思わないじゃない？
ねえ？肯定する人が現れませんでした…

《ズズズズズーーン》

「う、初春!？人には向き不向きがあるんだって!」

「そうですのよ!！しょうが無かったんですの!」

「どうせ私は全部不向きですよ…」

「は、春上さん、あっちに行きましょう!」

皆がフォローしてくれてる。うう、あんな簡単に取れるなんて…
完全に悪意100%じゃ足りないだろ

「そうだ、エアホッケーでもしよっか？」

「でもやり方が…」

「じゃあ、私と黒井でやるから見ててね」

なんかやる事になったね、しょうがないね

「行くわよ」「《ちゃりん》

「どっこぞ」

「……………（ニヤ）」

ズガン（御坂さんが板を弾く音）

ズゴン（反応も出来ずにゴールする音）

「き、汚い！流石御坂さん汚い！！」

「え、そんなことないよ」

悔しい、でも可愛過ぎる！
だけど、

「今度はこっちからですな」

能力を発動して…

「吹き飛ばせ！」《ズギャン》

通常の3倍の速度でいたを飛ばしてゴールさせる

「あるえ、おかしいなあ？ちょっと本気出しちゃったら、簡単にゴールしちゃった、テヘ」

「ふふふ、いい度胸じゃない？こっからは本気よー！」

《ガン、カキイイイン、ズガン、ズドドドド》

圧倒的、圧倒的激戦・・・！

数十分後

御坂さんは電気で機械を操り、俺は早さで対抗する
その結果、すごく長い時間戦ってしまった
そして今、俺のサーブでここを取れば俺の勝ちと言う状況だ

「これでえええ、終わりだああ！！」《ズギヤアアアン》

「させるか！」《カキイイン》

三倍の速度で放たれた板を自陣から放つ空気で緩和し、撃ち返す御坂さん

使いたくなかったが、ここで使わなければ行くぜ・・・

「速度決定、対象御坂御琴、時速2km！」《カキイイイン》

「何を・・・？」《スカツ》

速度決定、簡単に言うとは指定したものの速度を決定する
セロリ用に新しく作った必殺技的な・・・？
でもこれ、5秒間しか使えないんだよね・・・orz
そして御坂さんを遅くしてゴールさせる

「あれ、春上さんは？」

「たしか、休憩室の方に行くとか言ってたような・・・」

「じゃ、さつさと行きましょう?」

御坂さんに引つ張られて休憩室に行く

あの、首絞まってますよ…?」

休憩室

「あ、御坂さん、黒井さん、これいきませんか?」

佐天さんが大きなポスターを指さしてくる

えーと、花火大会?

「んー、いいんじゃないかな?」

「そうね、花火なんてきれいだし、行って見たいわね」

「よかつた〜!じゃ、黒井さんは一回私たちの寮に来てくださいね?」

なにい!これはお呼ばれされた!?!いいね最高だね!

どうしよう?むふふイベントかな?!

そんな感じで花火大会の約束をして別れましたとさ

続く続く…

乱雑解放【ポルターガイスト】事件 ? (後書き)

必殺技を遊びに使う主人公(笑)

今回遅れたのにあまり長くなってすみませんm()m

乱雑解放「ポルターガイスト」事件 ? (前書き)

花火っ大会ー!!

夏だ! 浴衣だ! 美女コンテストだああああ!!

うへへへへへry

作者が壊れたのでまえがき終了!

ゆっくりしてってね!

乱雑解放「ポルターガイスト」事件 ?

「…言い訳を聞こうか？」

「キヤー黒井さん似合ってますよ！こっち向いてー！」

おおっふ…何も聞いてねえ…。

ん、ああ、ちなみに俺はw k t kしながら佐天さんの部屋に行くと
なぜか浴衣を着せられて、記念撮影させられる事に…
畜生！またこんなんだよ！どうしろって言うんだよ！

「さあ！初春たちを迎えに行きますよ！」

「え！？俺このまま行くんですか！？」

冗談じゃない！？絶対にそんなのは許さないぞ！
しかし俺の全力の講義もむなしく、

「行きますよ…？」

「は…はい……」

佐天さんの一言で行く事に…これ完全に苛めだよ…

初春さんの部屋

「どつしてこつなってるの!？」

初春さんの部屋に入ると、そこにはリボンでくちやくちやに絡み合っている

初春さんと春上さんがいた。

おおっ…眼福眼福。

鼻血出してもしょうが無いよね…《ダボダボ》

「ちよっ!？黒井さん！鼻血鼻血!？」

「一寸顔洗ってきます…」

戦線離脱か…しょうがないね…でもこれは我が黒井メモリーズの第三位くらいかな…?

一位は何かって…?最初に御坂さんと会ったときの御坂さんの顔に決まってるんだろ。

言わせんな恥ずかしい…

数分後

「そろそろいいですか…?」

「いいですよ」

流石にこれ以上は女性の裸体をただで見るわけにはいかないので一応の確認を取る。

…いや、お金払えばいいって訳でもないだろうけど…

「わゝ、きれいになってる。うう、お母さんは嬉しいよ…」

「そんないきなり老けたような風に言わなくても…」

扉を開けると其処にはあの「ごちゃごちゃ」になっていた二人の面影はなく

所々に匠（佐天さん）のアレンジの加えられた着物を着た二人がいました。

某前後風に言ってみましたとさ

「あの、そろそろいかないと時間が…」

「あ、そうですね。少し遅れそうですし、皆さん乗ってください」

春上さんに指摘され、時計を見ると少し遅れていたの

能力を使って行こうと思い、しゃがんでおんぶする体制に入る

しかし、皆がなかなか乗らないので少し皆の方を見てみると少し揉めていた

初（え！？黒井さんいきなり何を！？そんな三人も乗れるわけ…）

佐（お、重いとか思われたらどうしよ…最近あんまり運動してなかったし…）

春（皆なんで乗らないんだろう…？）

なんかこのままだと面倒ゲフンゲフン！

長くなりそうだな、しょうが無い！

「フン！」

「「ちよっ！？黒井さん！？」」

（び、ビックリしたの…）

両腕に佐天さん、初春さん

危なっかしいので春上さんを背中に抱えて出発した

集合場所に行く与其処にはすでに御坂さん達がいた

「あ、遅いわよ。…って何でそんな事になってる訳!？」

「へ!？何が?…って、あ…」

御坂さんに指摘されて手元を見てみると、皆が目を回していた

「あ〜う〜。目が回る〜、世界も回る〜、私も回る〜」

「ふにゃ〜、目が まーわーるー」

「はあ…背中に乗ってるのに乗り物酔いしそうになったの…」

「す、すいませーん!」

これが私の全力前開の土下座!

…いや、本当にすいませんでしたアあああ!!

少年超土下座中……………

とりあえず数分全力で土下座した結果、

ここは全て俺の奢りにする代わりに許してもらえる事になった

「あ、このタコ焼きもおいしそうですね。買ってください」

「黒井！ゲコ太の！ゲコ太のお面が！」

「ちよつ！？財布が！財布の中身があああ！！！」

こいつを見てくれ。こいつをどう思う？

すごく…大きいです…（出費的な意味で）

…ってネタ入れてる場合じゃないよ！

マジで諭吉が飛ぶから！マジで！

「黒井さん！これ見てください！」

皆が人の金だと思ってどんどん進んでいるうちに
初春さんがあるポスターを見つけた。

え〜と、『夏の浴衣祭り！集え浴衣美少女！』…だと！

「『黒井』（さーん）」「『黒井』」

「ふ、ふざけるな！こんなの出てたまるかあああ！！！」

俺は男なのに最近扱いがだんだんと男の娘扱いになってきてるぞ！
全力で拒否すると、いきなり佐天さん達が

「あいたたた、さっき連れまわされたときの傷が」

「ああ、また目が回ってきたような気が！」

「え！？大丈夫！？《チラ》」

「ここぞとばかりに俺の弱みを突いて来る二人とちらちらこちらを見
てくる御坂さん。」

「この人たち最低だ！」

「うつつ。∴分かりましたよ！出ればいいんでしょう！」

「さっさとおちてやればいいんだ！俺が優勝できる訳無いしな…」

「ふざけんじゃねえエエエエ！！！」

優勝だと！？どうなってんだよ！やらせか！やらせだな！？
そんなこと言ってるって御坂さんが小言でぼそぼそと、

「ま、まさか優勝するとは∴黒井！恐ろしい子！」

「劇画タッチで言ってきた。」

「あなたが行けって言ってきたんでしようが！この人マジで外道だよ！
そんな事を考えていると、佐天さんが自信ありげに話しかけてきた

「さて、そんなことより花火を見るのにいい所を知ってるんですよ
！行きましょうよ！？」

「あ、いいですね。行きましよう、春上さん」

「うん…」

「じゃ、私たちもいこっか？黒子、浴衣美人グランプリ優勝の黒井さん？」

「いじめかっこ悪い！」

文句を言いつつも、結局行くところも無いのでついていく事にはじめは遊びだったのに…

「ほら、ここですよ！ここ！いい感じに見えませんか？」

「」「」「おお～」「」「」

佐天さんに暫く連れられて行くと、
其処からはとても花火が良く見え、さらにあまり人もいないという

完璧なスポットだった。

ていうか、さっきの超迷惑極まりないトロフィーが超重い…花火見えねえ…

「黒井さん、ちょっといいですか？」

「はい？」

暫く花火を何とか超不名誉なトロフィーをどけつつ、見てみると佐天さんに小声で呼ばれた。一体何の用だろう？

そして、二人で皆とは少し離れた所で佐天さんが話しかけてきた

「あの…く・ろい…さん」

《ドーン》

「何でしょうか？」

佐天さんが絞り出すような声で呼んでくる
本当に何の用なんだろう…

《ドーン》

「この前は…約束通り…すぐに起こしてくれてありがとうとついでにました…」

「いやいや、俺ほとんど何もしてませんよ？結局最後は御坂さんがやってくれたし」

どんどん声が小さくなって行く佐天さん。
なんだろう？どこか悪いのかな？

「それである…私は！」《ドーン》

「私は？」

ドンドン佐天さんの顔が紅くなる

何だろう…何かこの流れはラブコメとかで良くある告白みたいな感じだな。

ま、そんな事はまずあり得ないけどね！…自分で言ってる悲しくなってきた…

「私は！黒井さんの事が！^{ドーン}sです！」

「え！？ごめん、なんだって？花火で聞こえなかった」

花火がすごいバッドタイミングでなったせいで佐天さんの声が聞こえなかったので
もう一度聞き返す。

「だから私はあなたの事が！「春上さん！？どこに行くんですか？」
「春上さん！？佐天さん！行きましよう！」え…あっはい…」

春上さんがふらふらと歩いて行くのを見て、佐天さんの手をひいて
春上さんの方に走っていく。

ちらっと見た佐天さんの顔が妙に残念そうだったのはなんだったんだらう…？

「どこ？どこに居るの？」

「春上さん！？一体何を探してるんですか！？」

春上さんがふらふらと手すりにもたれかかりながら、何かを探しているような動作をしている。一体何を探してるんだ？

《ゴゴゴゴゴゴ》

そんな事を考えていると唐突に揺れが俺たちを襲う。地震！？こんな街頭だらけの所でこんなに揺れたら倒れまくってくるんじゃない？

悪い予感は当たる。これは鉄則である…その例外に漏れることなく街頭が初春さんと春上さん、そして佐天さんの頭上に倒れる。

「速度決定！対象街頭！速度1m/時！」

街頭の倒壊速度を操り、まず佐天さんを街頭の軌道からそらしたが初春さんのところに届くか！？いや考えるな！まず行動だ！

「加速！」

三倍の速度で一気に走り出すが、あまりにも距離が離れている。減速の範囲にも届かないほどの距離がある。やばっ!?!とどけええええ!

《ズドーン》

しかし、俺は初春さんたいには届かなかった…だが、初春さん達は無事だった。なぜなら、

「大丈夫? けがはない?」

巨大なロボットが街頭を支えていたからである。

乱雑解放「ポルターガイスト」事件 ? (後書き)

テスト期間が終わったんで、きつとこれから
更新スピードが速くなったらいいと思います…

次回まで！ゆっくり待っててね！

乱雑解放【ポルターガイスト】事件 ? (前書き)

おらがあああ!!ガンダムだああ!!!!

マジ意味フ

もっこそすしていつてね!!!

乱雑解放「ポルターガイスト」事件？

笹棚中女子寮前

「ここらへんで大丈夫です、ありがとうございました」

「そうですか？じゃ、お気をつけて」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

佐天さん達と挨拶して別れる。

まだ家には帰らない。流石にこの時間にファミレスにはいないだろうけど

一方通行の方は『実験』をしているかもしれない。

今は少しでも時間が惜しいからね。

それにしても、あの迷彩柄って何処に対応するために出来てるんだろう？

あの時…もしあのふざけたカラーのロボットが来てくれてなかったら初春さん達は…

情けないな…目の前の友人を助ける事も出来なかったなんて…

…ああ、一応言っておくけどさっきのあのピンクのロボットの事だからな。

天才でサイキョーな皆さんならお分かりだと思っが一応いつときますね。

「さて、一通り説明も終わったし、行きますかな？加速！」

要約して言うと、結局この日も情報どころか手がかりすらは掴めなかった

…くそっ、マジで時間が無くなってきやがった…

「ただいま…」

朝早くに誰もいない自分の家に帰ってくる。

携帯を見て時間を確認すると午前7時と表示されていた。

そして携帯のアラームを8時に設定して仮眠に入る

予定としては御坂さんの様子に変わりがないか御坂さんの居るであろう

風紀委員の支部に行かないといけないからな…

そしてそのまま布団にもぐりこみ、仮眠に入った…

仮眠終了のお知らせ

「なあ、ここ必要なのか？」

『尺稼ぎなつ』

「もう良いよ…」

作者に愛想を尽かしながら服を着替えて出発の準備をさっさと完了させ、

風紀委員の支部に出発した…

「うぐっ…超腹減った…コンビニでも寄っていくか」《グーグル》

加速して走っていたが腹がもう我慢できないと自己主張を激しくしてくる

いま、シリアスだっていつてんのにこの野郎…

しょうがないのでコンビニに入って手頃な物を探そうとするが…

「おまいら入り過ぎだろ…今何時だと思ってるんだよ…」

超・満・員・御・礼！いつもの事とはいえ、まだ八時半なんだが…

しょうがないのでファミレスで軽く食べようかな…

パンケーキくらいなら五分もあれば十分だろう

そんな訳でその場のファミレスに入店した…

『いらっしゃいませー。何名様でしょうか？』

見りゃわかると思っけどマニュアル通りの挨拶をする店員。
この挨拶、絶対いらないよね？

「一名さまです、どこか開いてますか？」

『では、あちらにどうぞ〜』

良かった、ちょうど開いてるみたいだ。

俺は運が良いね、日ごろの行いだよ。

案内された席に進んでいくと、横からうるさい声が…

店員さん、ここのお客さん迷惑ですよ。

…うん、へたれの俺にはそんなの言えないね、しょうがないね

せめてもの抵抗にぶっちゃけトークを余すことなく聞いてやるぜ！

…ふふ、恐ろしいだろう？

『ってな訳で結局鯖缶が来てるわけよ。アンチヨビ！アンチヨビが最高ね！』

『一体どっちなのよ…？』

『そんな事よりおうどんたべたい…』

…さて、こののんびりボイスは…

いや、聞いたことは無いが…って言うか『わけよ』って言ってたし、
もしかして…

恐る恐る、横の席をしてみる。

すると、そこには御坂さんと妹達を助ける重要な手がかりが…

(『アイテム』！？)

あまりに都合のいい展開に思わず笑いが堪えきれなくなる。
そしてそれと同時に少し恐怖が湧いてくる。

(落ちつけ、まずは落ちつけ…ここで話しかけても交渉材料は何もない…)

金…はあんまりないし…交渉材料ないな俺。…はあ)

考えれば考えるだけ自分の無力感に打ちひしがれる…

無策…圧倒的無策…一体何の根拠があつてこんな作戦を…

アイテムが居てもなにも出来ないじゃないか…鬱だ…だけど!

(諦めれる訳がない!)

やっと見つけた、たった一つの手掛かり。

目の前に…目の前にあるのに!

…今、俺に出来る事は…

『ありがとうございました』

店の場所を覚える事、だな?

場所を携帯のGPSに記録して店を出た…

乱雑解放【ポルターガイスト】事件 ? (後書き)

久しぶりの更新：その割には短かったり。
しょうがないね！』しょうがなくねエ！』

まさかの最終回…（前書き）

こんな小説を読んでくれたみなさま。

ありがとうございます…

この話をもちまして『とある科学の速度支配』の本編を終わらせていただきます。

詳しい情報はあとがきにて

では、ゆっくりして行ってね！

まさかの最終回…

「一寸」

「は？」

歩いていると不意に後ろから声をかけられて振り向くと其処には

【アイテム】の面々がいた。

そしてどうも俺の肩に手を置いていることから麦野さんが声をかけてきたようだ。

一体どうしてこうなった？

一応何でこうなったか尋ねてみよう

「あの、何でしょうか？」

「いえ、大したことではないんですけど…」

猫かぶりってことはわかってるけど…可愛いなあ。

いや、猫かぶりってことは…

「死んでください」 《ボツ》

「っ！？あぶねえ！？」 《シュッ》

「さっきからこっちを見てたから怪しいと思ってたが、やっぱりこっち側か？」

何だ？こっち側とか…まさか、暗部と勘違いを！？

冗談じゃねえ！さっさと逃げておくか

そうときまれば、麦野さんの手を掴んで…

「速度決定！対象麦野 沈理！速度0！」

速度を0にして相手が混乱しているうちに一気に裏路地に駆けだした。

(…やばいか？)

「あははは、みつかったら消し飛ばしちゃうぞー」

裏路地に飛び込んだのは軽率だったと自分の行いに後悔する。

人目に着かないことをいいことに原子崩し【メルトダウン】を乱射してきやがる。

幸い滝壺さんにAIMストーカーにはとらえれては無い様だが…

とりあえずつかつに能力が使えなくなっただってことか…

でも、それでなくても4人がかりで探されてるんだし…どちらにしても不味いな…。

「じわじわ嬲り殺しにしてあげる」

相手はレベル4二人にレベル5の原子崩し【メルトダウン】
これは完全にムリゲーか…どうしろってんだよ？

誰かに連絡しようとしても携帯の電子音でアウト、アンチスキルに
通報も同様にアウト。

ならば各個撃破？誰を倒せと？一番弱そうな滝壺さんは麦野さんの
隣に居るんだろうし…

一か八か飛び出して逃げる？…無理無理。逃げ切れるわけがない。
そんな考えていると…

「あ？」

「あ…」

金髪、頭にちょこんとつけた帽子、手に持った爆弾。

これはフレンド？…まずい見つかった！？

思考停止した頭を無理やり動かして演算を開始する。

もうこうなったら気絶してもらおう！

そして人質にとっておこう。

「加速！」

「っ！？」 《ガスッ》

腹に三倍の速度に加速させた拳を叩きこみ気絶させる。

そして大きく息を吸い込み

「お前らの仲間を捕まえた！こいつが大事なら俺を逃がしてもらおうか！」

さて、どこからレーザーが飛んでくるかな？
能力の全範囲に速度0での決定を適用することで座標が凶れなくな
る事を予防する。
そうしていると、

「全方位!？」

まずい、一応は速度0で動かなくなっているとはいえ
このままでは動けなくなつた。
まずい、体を通る隙間すらない。
このままだと…

「はろー、元気してたあ？」

「くっそつがあー!」

目の前にいま一番見たくなかつた顔が…
どうすれば…？

「なんか良くわかんないけど妙な技ね？
とりあえずじわじわ撃ち殺してあげるわ」

目の前でウインクしてこちらにレーザーを放つ麦野。
少しづつ、少しづつだが目の前のレーザーが押しこまれる。
やばい、これが力の差か。

自嘲気味に笑う。

ああ、思えばいろんな事があつたな…

初めて見た見た御坂さん…きれいだったな…

佐天さん、白井さん、初春さん。皆可愛かった…
生でみた上条さんもかつこよかったよね…

今思えば女装させられたのもいい思い出だったな…
ってふざけんな！こんな結末、納得できツかよ！

たとえどんな犠牲を払っても、こんなのみとめられねえ！
だからフレンド…すまん！

フレンドを麦野の方に向けて一気にとび出す。
フレンドに当たりレーザーが次々に消えていく。
そしてフレンドもボロ雑巾のようになっていく。
だが、それでも歩みを止めずにむしろはやめる。

「ゴミ以下のくせにこっちに寄ってきてんじゃねえよ！」《ドン》
絶叫と同時に麦野極太のレーザーをこちらに放ってくる。
しかし、それと同時にフレンド(だったもの)を麦野に投げ捨てる。
そしてフレンドの爆弾に着火して麦野の目の前で爆発する。

「っ痛!?!」

「吹き飛べ!」

爆発で怯んだ隙にさっきフレンドのポケットから拝借した爆弾をなげつけて
リモコンで起爆する。

「かつはっ!?!」

「もう一発!」《ゴン》

麦野の顔面に全力でパンチをかます。
どうやら意識が飛んだようだでぐったりとしている。

「…終わった？」

周りには俺と麦野とフレンド（だったもの）しかいなかった。
滝壺さんは…いなかったのか？

周りをきよろきよろと見渡して誰もいない事を確認すると能力を解除し、携帯でアンチスキルに連絡をする。

あとはアンチスキルに連絡すれば終わる。全部終わる。
また皆の所に帰れる。

『はい、何でしょうか？』

「助けてください！いきなり茶髪の髪の子に襲われて、それで金髪の子が殺され…《ガン》っ！」

頭に鈍い衝撃が走る。

そして世界が90°回転する。

（な、何が…？）

「あ、超大丈夫です。この人イタ電が超趣味なんですよ。だから超大丈夫です。」

「ご心配かけました。」

ピツと軽い電子音と共に携帯が投げ捨てられる。

そしてこちらを見下ろす茶髪のショートヘヤーの10〜12歳位の
子供。

こいつは…

(絹…旗…?)

ファミレスに居なかったから忘れてた…
まずい…頭が揺さぶられて演算が出来ない…
そしてゆっくりとこちらに歩み寄る。

「あなたがフレンダと麦野をやったんですか？
超意外ですね？滝壺、フレンダは超無事ですか？」

「うん、きぬはた。まだ息はあるみたい。」

「そうですね。ではあなた…二つの道を与えてあげましょう。
1つ、苦しんで死ぬか。2つ、自分の組織の名前を言ってから死ぬ
か。」

屈んでこちらを見下ろしながらしゃべる絹旗。

組織…？つまり俺にとっての仲間の名前ってことか？

……

「…はっ、言う訳無いだろうがこの幼女体型が！」

精いっぱい意地で声を絞り出す。

これが最後の言葉か…あんまりいい事言えなかったな…

《グチャ》

嫌な音と共に俺は死んだ。

まさかの最終回…（後書き）

はい、これで『とある科学の速度支配』スピードパラメータ 本編を終了します

あまりいい終わり方には出来ませんでしたね。

作者の文章力のせいで分かりにくかったり、更新速度が遅かったり
しましたが

皆さんお疲れ様でした。

次回から番外編を始めます。こちらは基本的には本編と関係ありません。

ですが、頑張って書こうと思いますのでよろしければ読んでやって
ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284t/>

とある科学の速度支配(スピードパラメータ)

2011年7月29日23時47分発行